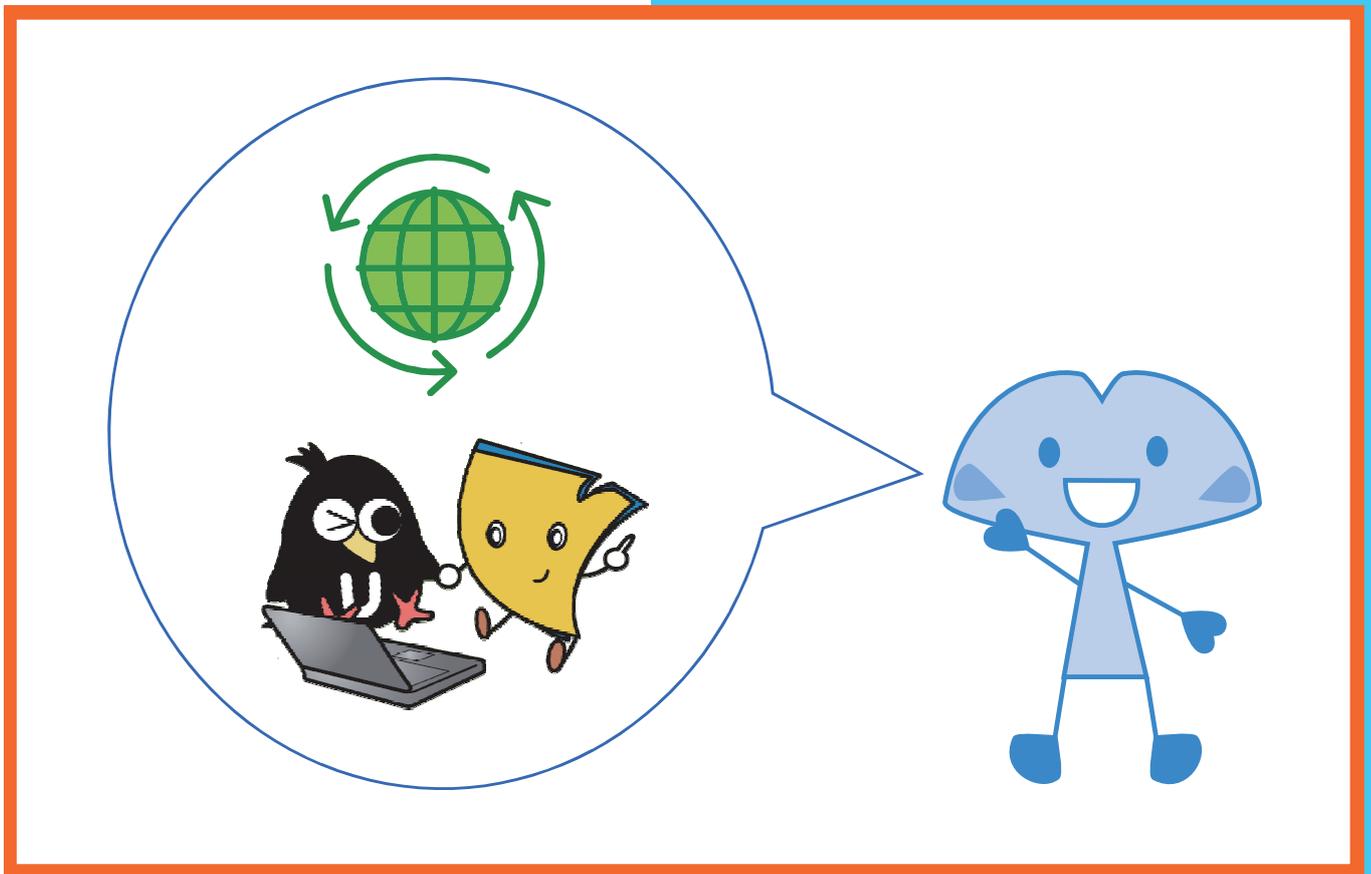


学内広報

for communication across the UT



特集：ノートPCリユース事業がスタート!!

2009.10.23

No.1391

ノートPCリユース事業がスタートしました！！

《特集》

ノートPCリユース事業とは・・・

学内資産の有効活用と、エコキャンパス化の取り組みの一つとして、研究室等で使わなくなったノートパソコンを再生して、学生へ無料でレンタルする事業です。

学生への研究、教育支援のため、どうぞご協力ください。



教職員の方へ
求ム！ノートPC

● 事業の概要

以前より、学内で廃棄されているパソコンを再利用させて欲しいという要望が学生からありました。

一方で、まだ機器としては十分使用できるのに、研究用としては機能が満たないためや、故障したために、研究室の片隅に眠ったまま、廃棄日まで保管されているパソコンが学内には複数存在しています。このノートPCを回収し、学生が再利用する仕組みを作ってみたいかどうかと考え、ノートPCリユース事業を立ち上げました。

大学で購入したノートPCは金額にかかわらず、必ず回収し、まだ使えるものは学生に再利用してもらい、最後はリサイクルすることで、**学生への教育研究支援と地球環境への貢献(*)**の両方の目的を兼ね備えております。

(*)リユースノートPCを使用することで、1台あたり約80kgの二酸化炭素が削減されます。(RIETA一般社団法人中古情報機器協会算出結果)

● 事業の仕組み

ノートPCが不用になりましたら、**美津野商事(株)の営業担当が直接研究室にお伺いして回収いたします**ので、下記美津野商事(株)の連絡先までご連絡ください。ノートPC内のデータ消去は、次の3つの方法からご選択いただけます。

- (1) 美津野商事(株)内で上書きソフトにより消去
- (2) 回収後、美津野商事(株)内でHDDの破壊
- (3) 回収時に、美津野商事(株)担当者が、提供者立会いの下で、HDDを取り外す

情報漏えいの心配は
ありません！

回収したノートPCはデータ消去後、本体をクリーニングし、OS(Windows XP)の再インストール、アプリケーションソフト(KINGSOFT OFFICE)、セキュリティソフト(ウィルスバスター2009)をインストールした後、大学(ノートPCリユースオフィス)に返却し、希望する学生に無料でレンタルします。



学生の方へ
1年間無料です!

● 募集～申込～返却まで

東京大学の学生なら誰でも申込ができ、1年間無料で、大学でも自宅でもどこでも使用できます(更新も可)。

是非、研究生活、学生生活に役立ててください。

ノートPCの募集開始のアナウンスはその都度、ポスター掲示、学生向けのサイト『UT-mate』、『UTask-Web』で行い、専用のホームページにアクセスしてもらいます。ここでは、実際のリユースPCの仕様(カタログ)、申し込み方法、利用の手引きなどを掲載しています。

希望者はホームページにある『リユースノートPC』使用申請書に、所属、氏名、連絡先、希望のノートPC、使用目的等必要事項を記載し、キャンパス内に設置してある回収BOXに提出します。

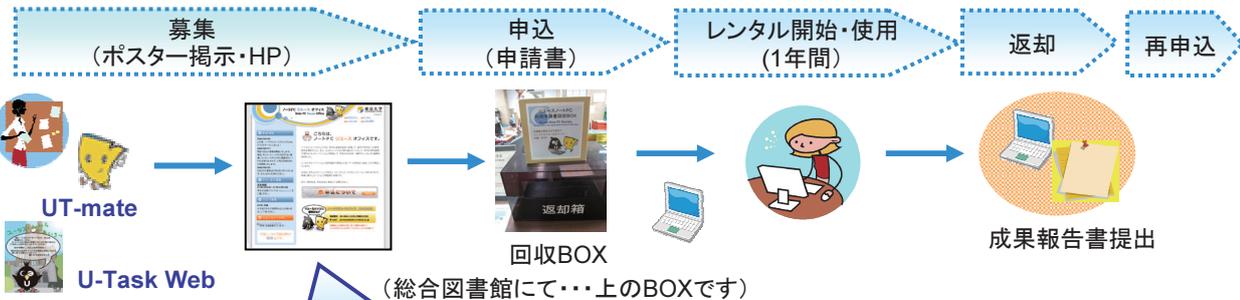
希望者が多数の場合は一定の選考基準により選定します。1年間無料で使用した後、成果報告書とともにノートPCリユースオフィスに返却をします(その後更新も可)。

ノートPCリユース事業にあたって

理事(副学長)
小島憲道



この度、東京大学では学内資産の有効活用と廃棄物の発生抑制のため、美津濃商事(株)と連携して研究室等で使用されなくなったノートパソコンを回収し、学生の学業に十分対応できる仕様に整備した状態で学生に無料で貸し出す「ノートPCリユース事業」を開始することになりました。この事業が、学内で廃棄されているパソコンの再利用を希望していた多くの学生の要望に応えるとともに、東京大学における「環境・リサイクル-3R計画(Reduce(廃棄物の発生抑制)、Reuse(再利用)、Recycle(再資源化))」のモデルケースとなりますよう願っています。



ノートPCリユースオフィスHP
<http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/>

例えばこんなPCをレンタルしています



TOSHIBA dynabook PARX1T9ELA
Core 2 Duo U7600 1.2GHz(2MB)
メモリ 2GB RAM HDD 64GB

★利用中の学生さんから★

総合文化研究科
地域文化研究専攻
博士課程 娜荷芽さん



私は勉強から趣味まで幅広くパソコンを活用しています。メインはレポートなどの作成ですが、その利点は脱字を指摘してくれたり、文法的間違いを教えてくれたり、グラフなど表も簡単に作成できることです。次に、私は趣味で地図を集めています、インターネットを用いれば、それが簡単に手に入ります。使いかたはいろいろですが、みなさんもよいパソコンライフを送ってください。

第1回目の募集は10月13日で締め切りました。
次回は22年1月頃を予定しています。
募集は年4回ほど行う予定です。

ご応募お待ちしております!

この事業に関するお問い合わせは...

ノートPCリユースオフィス
(本部資産経営グループ内)

E-mail: pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp

内線: 22135(担当 青木・高橋)



※ 次号から連載コラム『PCリユースのわ』が始まります。乞うご期待!!

NEWS

一般ニュース

地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA)
第3回 統合地球エネルギー・水循環
観測プロジェクト (CEOP) 会議開催

一般

当機構の機構長 小池俊雄教授(工学系研究科)が共同議長を務めるCoordinated Energy and Water Cycle Observations Project (CEOP。通常セオップと呼ばれる)の第3回実行計画会議が8月19日(水)から21日(金)までの3日間、オーストラリアにて開催された。

当機構が開発運用を担う国家基幹技術「データ統合・解析システム (DIAS)」は、世界気候研究計画 (WCRP) と協力して、水・エネルギー循環に関する世界の52の地上観測サイトのデータ、JAXA や NASA などの地球観測衛星のデータ、気象庁をはじめとする世界13の数値気象予報モデルの出力からなる CEOP のデータ統合の役割を果たしており、データ投入、品質管理、アーカイブ、世界の研究者への公開など、水循環に関わる気候研究の重責を担っている。

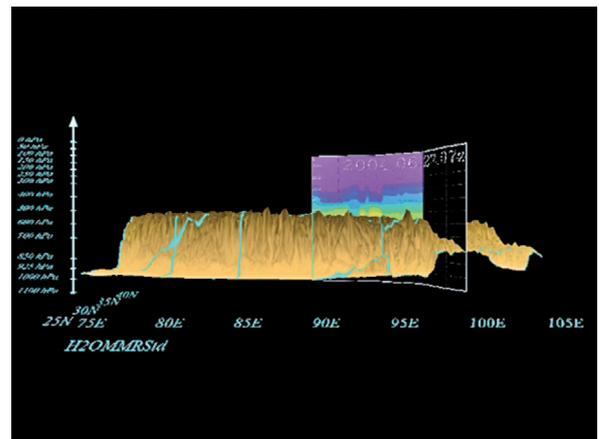
参加したのは、地上観測サイトの観測研究の専門家、衛星機関の代表、数値気象予報モデルグループ、領域的な水文気候 (モンスーン、半乾燥地域、寒冷圏、高緯度帯地域) を研究するグループの研究代表者、およびデータ管理の研究者で、アジア、オセアニア、アメリカ、ヨーロッパの10カ国の国々から51名の参加があった。

会議では、2001年から2010年までの10年間のCEOPデータセットを作成する計画について、また、これまでのCEOPの顕著な研究活動を、ひとつの総合報告書としてまとめるために、議論を重ねた。最終日には、Global Approach と Regional Approach の二つのグループに分かれてブレイクアウトセッションが行われ、それぞれのグループから、総合報告書に反映されるべき、次年度の研究目標などが具体的に紹介された。



CEOP 会議参加者

また、本機構 EDITORIA の生駒栄司特任助教、安川雅紀特任助教(ともに生産技術研究所喜連川研究所所属)が、世界最先端のIT技術を駆使した、データアップロード・品質管理システムや、三次元の映像によるデータ解析の様子を可視化したシステムを紹介すると、参加者からは大きな反響が寄せられ、ぜひ使ってみいたいという要望も数件あがった。



安川特任助教による3次元可視化のプレゼンテーション

会議のプログラム、プレゼンテーション資料、その他詳細については、CEOPのWebサイトからご覧ください。

CEOP

<http://www.ceop.net/>

第3回 CEOP 会議

http://monsoon.t.u-tokyo.ac.jp/ceop2/meetings/3rdCEOPAnnMtg_Melbourne2009/

お問い合わせは、EDITORIA 内 CEOP 事務局までお願いします。

TEL : 03-5841-6132

E-mail : ceop@monsoon.t.u-tokyo.ac.jp

産学連携本部



平成 21 年度第 1 回東京大学産学連携協議会アドバイザーボードミーティング開催される

9月2日(水)15時より、平成21年度第1回東京大学産学連携協議会アドバイザーボードミーティング(ABM)が本部棟12階大会議室で開催された。

ABMは、本学理事と産業界アドバイザーが産学連携について意見交換を行う場で、今年度で4期目となる。最初は自己紹介もかねて6名の本学理事と、4名の産業界アドバイザー(詳細は写真2枚目)の挨拶後、議論の場が設けられた。

影山和郎産学連携本部長より、「産学連携本部の活動報告」があり、2008年度は株式会社東京大学TLOの発行株式を100%取得したこと、共同研究が件数・金額とも過去最大になったこと等の報告があった。

その後産業界アドバイザーの古川一夫氏(㈱日立製作所特別顧問)より「東京大学への期待」と題して提案があり、「仲間意識と人的ネットワークを強みとする、グローバルに活躍できるリーダー人材の育成」があげられた。

濱田純一総長より、「森を動かす。世界を担う知の拠点へ」と題して、「法人化後の仕組みやその可能性を十分に活用し、東京大学の基底から湧き上がる力を最大化し、持続可能なものとしていく」ための行動シナリオを来年1月に公表予定であること等が説明された。

産業界側からは「知力と人間力、国際的な力を鍛えたタフな東大生」を熱望されたほか、留学生や女子学生を増やすこと、燃え尽きた学生をつくらないようにといった要望が寄せられ、活発な議論が交わされた。



ABMで議論する様子



第4期ABMメンバー

前列左から:西山徹氏(味の素(株)技術特別顧問)、榊原定征氏(東レ(株)社長)、濱田純一総長、佃和夫氏(三菱重工(株)会長)、古川一夫氏(㈱日立製作所特別顧問)

後列左から:松本洋一郎理事(副学長)、田中明彦理事(副学長)、前田正史理事(副学長)、佐藤慎一理事(副学長)、小島憲道理事(副学長)、江川雅子理事、影山和郎産学連携本部長

地球観測データ統合連携研究機構(EDITORIA)



「データ統合・解析システム(DIAS)」 文部科学省研究開発局審議官視察

文部科学省研究開発局の森本浩一審議官が、9月9日(水)に、本学地球観測データ統合連携研究機構(EDITORIA)が国家基幹技術「海洋地球観測探査システム」の基幹要素として開発研究を担っている「データ統合・解析システム(DIAS)」のコアシステム(生産技術研究所設置)を視察に訪れた。16時30分からの野城智也生産技術研究所長による挨拶から始まり、小池俊雄機構長によるプロジェクトの概要説明が行われ、17時30分から喜連川優生産技術研究所教授によるツールのデモンストレーションやコアシステムの紹介が行われた。



小池機構長によるプロジェクトの説明

プロジェクトの概要説明においては、小池機構長から気候、河川・水資源、農林水産業、生物多様性、保健・人類生態などの分野に対する諸課題の解決や科学技術外交を実現させるため、学内7部局が分野横断的に連携し、

さらに宇宙航空研究開発機構（JAXA）や海洋研究開発機構（JAMSTEC）と協力して実施している研究内容の紹介があった。さらに今後の DIAS の利用実証フェーズの戦略として、「理学的アプローチ」である気候変動予測により「世界で共有できる知の創造」を実現すること、「工学的アプローチ」である影響評価により「分野を横断して共有できる知の創造」を実現すること、そして「社会経済学的アプローチ」で諸課題に対する適応策を考え、「体感できるデータと情報」を提供することによって、文部科学省の新たな施策である「低炭素社会づくりの行動計画」の一翼を担う構想が示された。

喜連川教授からシステムの全体像の説明の後、「データ品質管理ツール」、「3次元可視化ツール」、「メタデータ登録ツール」など各ツールを開発した研究員からデモンストレーションやコアシステムの紹介が行われた。



審議官にコアシステムの構成を説明する喜連川教授

説明や見学を終え、森本審議官からは、利用者のニーズに応えることや DIAS という限られた資源をどう配分するかというルールを決める必要があること等の指摘があった。また、グローバルなデータは超大容量で、ローカルなデータは多様性が大きい。超大容量と多様性の両者が、DIAS を通じてうまくつながることに留意して、引き続き本機構の分野連携による知の統合化を推進するようにとの激励を頂いた。

地球観測データ統融合連携研究機構（EDITORIA）
<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/>

海洋アライアンス

第6回イブニングセミナー開催

一般

9月14日（月）、本郷キャンパス工学部3号館において、海洋アライアンスが主催する第6回イブニングセミナーが開催された。今回は生産技術研究所から澤田賢治客員教授とソートン・ブレア助教を講師としてお招きし、以下のテーマで、ご講演いただいた。

- ・世界経済危機後の資源動向とサプライチェーン
澤田賢治客員教授
- ・マンガクラストのセンシング技術の開発—パラメトリック音響と in-situ レーザー誘起破壊分光法—
ソートン・ブレア助教

澤田客員教授の講演は、銅を中心とした鉱物資源の動向についてである。世界第1位の銅消費国である中国の銅消費や、大規模な8鉱山のうち6鉱山を有するチリの鉱山業の現状などについて解説し、今後、鉱物資源の動向把握や有効利用が重要であるとの考えを示した。また最後に膨大なポテンシャルをもつ海底鉱物資源に期待を表した。

続くブレア助教の講演は、高周波音響を用いたマンガクラストの厚さ計測技術についてである。これは超音波の反射の時間差からクラストの厚さを連続的に計測する技術であり、サンプルをとらず広域に厚さを図る調査を実現することを目的に研究を進めている。またレーザー誘起破壊分光法を用いた in-situ 成分分析についても解説し、従来数カ月かかるサンプルの成分分析の結果を、リアルタイムに得ることを目的に開発している現場型センサーについて紹介した。

今回のイブニングセミナーも各部局から多くの参加者が集まり、講演に耳を傾けた。各々が世界の鉱物資源の動向や最先端の計測技術について情報を共有できたことは分野横断組織として意義深い。また参加者から様々な質問や意見が飛び交い、関心の高さが窺われた。

次回のイブニングセミナーは11月に開催予定です。詳しくは海洋アライアンスのホームページをご覧ください。多くのご参加をお待ちしています。

海洋アライアンス ホームページ：
<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp>



イブニングセミナーの様子

本部奨学厚生グループ

本郷第二食堂リニューアルオープン

一般

9月14日（月）、本郷キャンパス内の第二食堂がリニューアルオープンし、多くの利用者が訪れた。これに先立ち、当日9時30分より小島憲道理事（副学長）、杉山健一副理事、高橋進東大生協理事長、経済学部4年生大久保智夫さん、文学部3年生三ヶ島ちひろさんらによるテープカットが行われた。



左から三ヶ島さん、高橋理事長、小島理事（副学長）、杉山副理事、大久保さん

本改修は、東京大学消費生活協同組合から東京大学基金への寄附により、1934年の建物竣工後ほどなく営業が開始された長い歴史を持つ第二食堂の老朽化した施設・設備の改善・更新を行うとともに、「食育」・「環境」・「国際化」という極めて現代的なテーマを掲げ、時代に即した理念に基づく食事の提供を実現するために行われたものである。

メニューにおける改善点で特筆すべきは、宗教上制限のある留学生への配慮をした豚肉やアルコールを使用しない「ハラール食品」の種類が増え充実したことである。身近な国際交流の場としても活用をしていただきたい。

さらに、「学生企画コンテスト」で優秀賞を受賞した「本郷食環境改善プロジェクト」の学生らの要望が反映されたことにより、利用者である学生の視点からの改善に対する熱い思いが取り入れられており、単なる老朽化した古い設備の更新だけに留まらない充実した意義深いリニューアルとなった。



メニューの組み合わせが自由なカフェテリア食堂

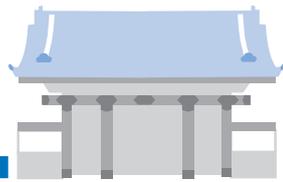
読者投稿写真 No.3



梅林の柵に今夏登場した朝顔(変種も有)

(撮影: 総合文化研究科 学部報担当職員 鈴木基美さん)

部局 ニュース



大学院経済学研究科・経済学部

部局長の交代



部局

平成 21 年 10 月 1 日より、下記のとおり、大学院経済学研究科長・経済学部長の交代がありました。新部局長を紹介するとともに、退任された部局長のご挨拶を掲載します。

【新部局長】 吉川 洋
【前部局長】 伊藤 元重

新部局長紹介

吉川 洋 教授

(平成 21 年 10 月 1 日～平成 23 年 9 月 30 日)



1974 年 東京大学経済学部
卒業
1978 年 イェール大学大学院
博士課程修了 Ph.D.
1978～82 年
ニューヨーク州立大学助教授
1982～88 年
大阪大学社会経済研究所
助教授

1988 年 9 月 東京大学経済学部助教授

1993 年 2 月 同教授

所属：経済理論専攻経済理論講座

専門分野：マクロ経済学

研究内容（代表的な著書、編著等）：

・“The General Theory: Toward the Concept of Stochastic Macro-Equilibrium,” in B. W. Batman, et al. eds. *The Return of Keynes: Keynes and Keynesian Policies in the New Millennium: Harvard University Press*, 2009

・“Labour Productivity Superstatistics” (with H. Aoyama, H. Iyetomi and Y. Fujiwara), *Progress of Theoretical Physics, Supplement, Number 179*, 2009

・*Reconstructing Macroeconomics: A Perspective from Statistical Physics and Combinatorial Stochastic Processes*, (with M. Aoki), Cambridge University Press, 2007

・“Stock Prices and the Real Economy: Power Law versus Exponential Distributions,” (with M. Aoki),

Journal of Economic Interactions and Coordination, 2006

・“The Role of Demand in Macroeconomics,” *Japanese Economic Review*, 54, 1, 2003

部局長退任の挨拶

経済学研究科学術交流棟（小島ホール）の完成

前大学院経済学研究科長・経済学部長
伊藤 元重

この 9 月をもって 2 年間の大学院経済学研究科長・経済学部長の任期が終了した。大学院経済学研究科・経済学部は 10 月に学部長交代という伝統を守っている。太平洋戦争中に大学から追放された教授陣が終戦後大学に戻ってきた時以来の伝統だという説を聞いたことがあるがその真偽は確認していない。

私の研究科長・学部長の任期が終了する直前に、経済学部の新棟が完成した。赤門の横に立っている地上 5 階、地下 2 階の建物で、周囲の雰囲気にもマッチしたなかなか洒落た建物である。小島鎌次郎氏および小島プレスグループ企業からの寄附のおかげでできた建物であり、この建物の利用に経済学研究科や経済学部の今後のあるべき姿が見えてくるように思われる。

建物の下層階は主に資料や図書関係の施設となっている。図書の利用に役立ててほしいという小島氏の意向を反映したものである。大学院経済学研究科・経済学部には、日本有数の経済学関係の図書や様々な資料が存在する。これを研究科・学部の教職員や学生だけでなく、広く外部の人にも利用してもらいたいというのがこの新図書室・資料室の狙いである。もちろん、赤門総合研究棟にある図書室はこれまで通りの機能を維持する。

新棟の 3 階以上の部分には、日本経済国際共同研究センター、金融教育研究センター、経営教育研究センターの 3 つのセンターが配置される。経済・金融・経営の分野で外部との交流を深め、教育研究の質を高めていく上でこれらのセンターに大いに期待している。

大学院工学系研究科・工学部

部局

イアエステ (IAESTE) 研修生歓迎会、
開催される

7月24日(金)、本学本郷キャンパス第二食堂にて、イアエステ (IAESTE) 研修生の歓迎会が行われた。イアエステは理工農薬系学生のための国際インターンシップを仲介している国際非政治団体である。国際的な広い視野を有するエンジニアを養成することを目的として、1948年以來、ヨーロッパを中心に活動を続けており、ユネスコ、国際経済社会理事会及び国際労働機関を諮問団体として、4千社に及ぶ企業の後援を軸に、現在世界80余カ国が加盟し、これまでに30万人近い学生を相互に交換してきた。

イアエステの日本委員会であるイアエステ・ジャパンは、「日本の大学に在籍中の工学系学生の諸外国における技術研修および諸外国の工学系学生のわが国における技術研修を援助し、国際親善と相互理解の増進に寄与すること」を目的としている。理事役員メンバー（東京大学等の理事校教員や賛同企業の関係者）の指導の下、事務局職員と学生ボランティアによって運営されている。

本学では、海外への学生の派遣の他に、日本への受け入れも行っている。2009年度にはドイツ、ポーランド、ノルウェー等から22名の研修生を受け入れた。研修期間は個人で異なるが、多くは7月から9月にかけてである。研修生には、イアエステの日本人学生ボランティアが1名付き、滞在中のサポート等を行っている。

今回実施された歓迎会は、東京大学工学部における学生、教職員および卒業生の親睦団体である丁友会と、イアエステによって共催された。18時から20時まで開かれ、研修生をはじめ、そのホストファミリーや、受け入れ研究室の関係者、学生ボランティアなど総勢約90名の方々に参加していただいた。ホストファミリーの方々もご家族で参加され、歓迎会はとても盛況であった。また、研修生や、ホストファミリー、大学関係者のとても良い交流の場ともなった。



2009年度イアエステ研修生歓迎会

生産技術研究所

部局

文部科学省次世代IT基盤構築のための研究開発
第1回「イノベーション基盤シミュレーション
ソフトウェアの研究開発」シンポジウムを開催

「ものづくりを変革するシミュレーション技術の挑戦」をメインテーマとし、7月30日(木)、31日(金)の2日間にわたり、第1回のイノベーションソフトプロジェクトのシンポジウムが生産技術研究所 An 棟コンベンションホールで開催され、文部科学省をはじめ、各界から延べ502名の方々にご参加いただいた。本プロジェクトでは、バイオ及びナノデバイス分野における先進的な技術開発とその応用を包含した形での次世代ものづくりに焦点を当てている。それに対しては、従来の役割を超えたシミュレーション技術の新しい貢献が必須であり、その方向を見極めることが今回のシンポジウムの大きな目的であった。

1日目は、野城智也生産技術研究所長の挨拶で始まり、生産技術研究所教授 加藤千幸プロジェクト代表による概要紹介に次いで、トヨタ自動車株式会社の岡本一雄代表取締役副会長、株式会社半導体先端テクノロジーズの大路謙取締役部長、及び持田製薬株式会社の西島和三医薬開発本部専任主事からご講演をいただいた。続くパネルディスカッションでは、横浜国立大学の白鳥正樹特任教授と大阪大学蛋白質研究所の中村春木教授にも議論に加わっていただき、パネリストと会場が一体となって次世代ものづくりを牽引するシミュレーション技術について活発な議論が展開された。2日目にはプロジェクトの推進役であるバイオ、ナノデバイス、次世代ものづくりの各分野のリーダーより開発中のソフトウェアの最新状況が報告された。また、それぞれのテーマに関してスーパーコンピューティング技術産業応用協議会のワーキンググループの代表の皆様から今後の活動も紹介され、産業界からの期待やソフトウェアの普及に向けてプロジェクトと連携してどのような取組みをしていくかなどについて意見交換がなされた。

会場には、企業の現場でご活躍されている方々が多数参加されており、活発に質疑応答が行われるなど、産業界での新規シミュレーション技術への期待の高さを窺うことができた。



野城智也生産技術研究所長の挨拶



パネルディスカッション風景



生産技術研究所教授 加藤千幸プロジェクト代表による概要紹介

部局

大学総合教育研究センター、海洋アライアンス

「海洋学分野における日中横断型教育ワークショップ」を開催

大学総合教育研究センター、海洋アライアンスと中国海洋大学は、8月24日（月）、25日（火）に、中国山東省青島市で日中横断型教育研究ワークショップを開催した。

海は地球表面の7割を占めており、日本と中国は海によってつながっている。このため温暖化などの地球環境問題、食糧問題、生物多様性問題などの諸問題を解明・解決するために、日本と中国の海洋教育・研究に関する協力、交流は不可欠である。また、近年日本と中国において、大学における学際的あるいは分野融合的な教育を実施するという共通の動きも見られる。このような海洋教育に関して新たな教育の取り組みを行っているのは、海洋アライアンスと中国海洋大学である。

東京大学では、平成21年度から、各学部・研究科または教育部における固有の教育カリキュラムに加えて、4つの学際的あるいは分野融合的な部局横断型教育プログラムが開設された。その1つとして、海洋アライアンスは理系・文系といった従来の枠組みを超えた学際領域としての海洋学の総合的な発展と、日本の海洋政策の総合化および国際化を担いえる人材の育成を目指す「海洋学際教育プログラム」を立ち上げた。

他方、中国海洋大学は中国の海洋教育・研究に関するトップ大学であり、理学、工学、農学、水産学、経済学、文学、医学、薬学、法学、教育学などの学部・学科を有する国家総合重点大学である。また国家「211プロジェクト」及び「985プロジェクト」に認定されている大学の一つでもある。近年「跨学科教育」（学部・学科を跨る教育）を目指して、様々な試みを行っている。

また、大学総合教育研究センターは教育に関する研究を行い、内外の高等教育機関との学術交流を積極的に推進している。こうした経緯から、今回のワークショップを共同で企画した。日中両国の「横断型」教育、とりわけ海洋学分野における横断型教育について、両国の研究者の交流の場を設け、また海洋に関する様々な問題についての共同研究のきっかけを作ることが今回のワークショップの趣旨である。

ワークショップにおいて、東京大学側は、海洋アライアンス副機構長の木暮一啓教授が「機構『海洋アライアンス』について」、大総センターの劉文君特任研究員が「東京大学の教養教育の理念と横断型教育プログラム」というタイトルでそれぞれ発表を行った。中国海洋大学側は、学長補佐の李巍然教授、高等教育研究・評価センター・副センター長馬勇教授、法政学院の宋寧而講師、経済学院の邵桂蘭教授、文学と新聞マスコミ学院副院長の傅根清教授が、中国、中国海洋大学の学科・分野融合的な教育の試みについて報告を行ったほか、14本の発表要旨や論文が配付された。参加者は40人余りであった。日中両国の研究者は、「横断型」教育の現状、問題点、趨勢などについて活発な議論を行った。

また、日本側の参加者は、中国海洋大学と連携して教育・研究を行っている中国海洋局第一研究所を視察し、教育・研究のあり方および日中交流の可能性について、中国海洋大学と中国海洋局第一研究所の研究者たちと意見交換を行った。



ワークショップ参加者による記念写真

医科学研究所



医科学研究所附属病院でサマー・コンサート開かれる

8月25日(火)16時から、医科学研究所附属病院においてサマー・コンサートが開催された。山下直秀病院長の開会の辞で始まった今回のコンサートは、エンジェル・ハープ三重奏団C o C o R i (ココリ)の皆さんと山川俊純氏のギター、パーカッションの共演であった。エンジェル・ハープは膝に乗せて演奏するノンペダルの小型のハープで、天使のような美しい音色を奏でてくれた。3人のハープの高音のメロディーと、ギターやパーカッションの低音やリズムが見事に調和して、すばらしいメロディーが会場に響いた。ハープ用にアレンジされた「ボッケリーニのメヌエット」や「水上の音楽」のようなクラシック曲から、「ドレミの歌」や「猫踏んじやった」、「夏の思い出」などのスタンダードな曲、「さんぽ」、「崖の上のポニョ」のような比較的最近の楽しい歌まで、年配の方々も若い人達も楽しめる曲の演奏であった。

コンサート会場の会議室には、入院中あるいは外来通院をしている患者さんのほかに、ご家族の方々、看護師等病院関係者など80人以上の人達が集まり、夏の日の夕べを、美しいメロディーと心温まる演奏で過ごした。最後に佐藤喜佐子副看護部長の謝辞で、約1時間にわたるコンサートは、快い興奮のうちに幕を閉じた。



演奏する山川氏とC o C o R i (ココリ)の皆さん



病院棟8階会場の聴衆の皆さん

史料編纂所



オランダ歴史研究所との共催セミナー開催

史料編纂所は、8月31日(月)、オランダのハーグ市の王立図書館会議室において、オランダ歴史研究所と「オランダと日本の歴史に関するオランダ語史料、その公開と編纂」と題する公開セミナーを共催した。これは、両国の歴史学の研究に寄与するため、ともに自国史の史料編纂機関である両研究所が、その活動、特に近年の編纂物や新しいプロジェクトなどを紹介したものである。オランダ歴史研究所は、現在はオランダ科学研究機構に属する研究機関で、研究とともに史料集の編纂及び、史料へのアクセスを容易にするデータベースやガイドブックなどの作成等を通じ、歴史研究を促進するための活動を行っている。

歴史研究所所長ドナルド・ハックス氏の挨拶の後、史料編纂所からは、海外史料室でオランダ語史料を担当する松井洋子教授が史料編纂所の活動と『日本関係海外史料 オランダ商館長日記』の出版について、松方冬子准教授が、最近公開を開始した欧文による『バタフィア発信書翰控簿目録データベース』について紹介した。

オランダ側からは、歴史研究所の研究部長であるヘリット・クナープ氏が、同研究所の史料編纂の歴史と現状、今後の課題等を提示し、隣接する協力機関であるオランダ国立中央文書館のハンノ・デ・フリース氏が日本と関わりのある歴史系データベースを紹介した。

セミナーは50名ほどの参加を得、ユトレヒト大学教授でオランダ植民地史の重鎮ユル・ファン・ホール教授の司会で、歴史史料の編纂が歴史家ばかりでなく市民や別の領域の研究者にも有用であることや、デジタル化への期待などについて、活発な意見交換が行われた。



当日の討論の様子

■分子細胞生物学研究所

特任講師 田中稔、特任講師 北川浩史
特任助教 作野剛士、特任助教 西村教子

■医科学研究所

特任准教授 全泰和
(代理発表) 特任研究員 楠畑かおり
特任講師 中江進、特任助教 Beate Heissig
特任助教 山下理宇、特任助教 山本勝良
特任助教 横山一剛

「卓越した若手研究者の自立促進プログラム」ホームページ:

<http://www.iam.u-tokyo.ac.jp/wakate/>



松本洋一郎理事(副学長)による開会挨拶



研究発表の様子

「卓越した若手研究者の自立促進プログラム」医科学研究所、分子細胞生物学研究所、物性研究所、地震研究所

部局

「卓越した若手研究者の自立促進プログラム」中間成果発表会を開催

9月2日(水)、本学弥生講堂アネックス セイホクギャラリーにおいて「卓越した若手研究者の自立促進プログラム」中間成果発表会が開催され、134名の参加があった。

本プログラムは科学技術振興調整費「若手研究者の自立的研究環境整備促進」の平成19年度採択課題であり、国際公募により採用された優秀な若手研究者に研究スペースと研究資金を提供し、自立した研究者となるための支援を行う取り組みとして医科学研究所、分子細胞生物学研究所、物性研究所、地震研究所をモデル部局として実施されている。

この発表会は平成19年度及び平成20年度に本プログラムにより採用された若手研究者14名への中間評価の一環として実施されたもので、一人につき20分の発表、及び各所属研究所・学内他部局・学外研究機関から参加の評価委員による5分間の質疑応答という形式で行われた。

発表者は以下のとおり(発表順)。

■地震研究所

特任助教 波多野恭弘、特任助教 田中宏幸

■物性研究所

特任講師 板谷治郎、特任講師 大串研也

医科学研究所

部局

新型インフルエンザ公開シンポジウム「Pandemic」を開催

医科学研究所は、9月4日(金)にインフルエンザの専門家4名を交えての新型インフルエンザ公開シンポジウム「Pandemic」を安田講堂で開催した。本シンポジウムは、新型インフルエンザウイルスが2009年3月にメキシコを起点に世界中に流行し始め、北半球から始まった流行が、現在、冬の南半球で猛威を振るっていることに注目しての企画であった。2009/2010年の冬に向けて、これまでに得られた国内外の情報を共有し、今後の

対策や治療などに関する公開討論を行った。

最初に、世界保健機関（WHO）の進藤奈邦子メディカルオフィサーが、「H1N1 新型インフルエンザの登場と疫学」という演題で講演した。5月に近畿地方で流行した際に、休校やビッグイベントの中止で見事に流行を抑え込んだ例を紹介し、休校等の公衆衛生学的対策が有効であったことを示した。次に、医科学研究所の河岡義裕教授が「H1N1 新型インフルエンザの特徴」という演題で講演した。新型インフルエンザは季節性のものと比べて肺で多く増えることから肺炎で重症となるケースが多いことや、新型インフルエンザの抗体は90歳以上の人にしか見られないことをデータを示して説明した。続いて、国立感染症研究所感染症情報センターの岡部信彦センター長が「日本のインフルエンザ対策」という演題で、また、神奈川県警友会けいゆう病院の菅谷憲夫小児科部長が「この冬どう備えるべきか」という演題で講演した。

講演の後、4名の講演者が壇上に並び、会場から寄せられた質問票をもとに質疑応答と討論を行った。この討論では、新型インフルエンザ対策は、「一つの方法に頼るのではなく、公衆衛生学的対策、ワクチン接種、抗ウイルス薬の使用といったいくつかの対策の相乗効果で防いでいくことが重要である」ということが結論付けられた。

参加者は約1100名に上り、大盛況のうちに終了した。



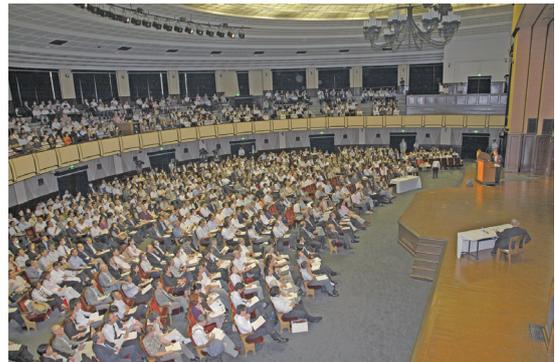
進藤奈邦子 WHO メディカルオフィサー



講演を行う河岡義裕教授



ディスカッションの様子



シンポジウム会場の様子

生産技術研究所
平成21年度 自衛消防活動審査会
へ参加！
部局

防災の日にちなみ、平成21年度自衛消防活動審査会が9月4日（金）13時から17時まで、ダイエー碑文谷店第1駐車場にて開催された。目黒消防署所轄の各機関・事業所から、合計31隊の参加があり、本研究所からは自衛消防隊として、研究室の准教授等によるAチーム、事務部職員によるBチームの計2チームが参加した。

審査会では地震発生時対応、負傷者応急手当、屋内消火栓操作、放水活動等の一連の流れの「安全・確実性」「士気」「隊全体の連携」についての評価が行われた。両チームは日常業務の合間をぬって、本番まで動作の確認を毎日繰り返しながら、目黒消防署隊員の厳しくも温かい指導のもと、短期間で集中して技能を習得し、チームワークを培った。

審査会本番は緊張感漂う中、きびきびとした活発な活動が行われ、日頃の訓練の成果を遺憾なく発揮した。また、他のチームの優れた演技を見る事で消防意識が高まり、今後は本研究所全体での防災のため、さらに自衛消防活動に取り組む必要性を強く感じた。



生産技術研究所自衛消防隊Aチーム



生産技術研究所自衛消防隊Bチーム



負傷者応急手当の様子



教育学部棟正面玄関に置かれたAEDと車イス

講習会には、本学部の学生・教職員をはじめ、教育・学生支援系や史料編纂所等の職員も参加して行われた。講習会は、最初に武藤芳照研究科長の挨拶、本郷消防署浅見係長から最近の救急状況の説明があり、渡邊主任の救命行為の注意点、器具・操作方法の説明後、参加者約30名が訓練用のAEDを使って、実際の救命行為の訓練を行った。

参加者からは、実際に操作を体験してみて、取り扱う際の難しさ等の感想が寄せられ、万が一の場合に備えた有意義な講習会であった。



実技指導の様子

大学院教育学研究科・教育学部
 AED（自動体外式除細動器）操作講習会開催
 部局

大学院教育学研究科・教育学部では、8月から正面玄関にAED及び外来者用車イスを設置したことに伴い、大学院入試や様々な行事が始まる前の9月10日（木）に本郷消防署浅見匡哉生活安全担当係長、渡邊均主任を講師に招いて、AEDの操作講習会を開催した。

AED等は、本学部の学生・教職員及び来訪者のもとより、赤門に最も近い部局のため学外者も多いことに対応するために設置したものである。

医科学研究所
 第16回東アジアシンポジウムに参加
 部局

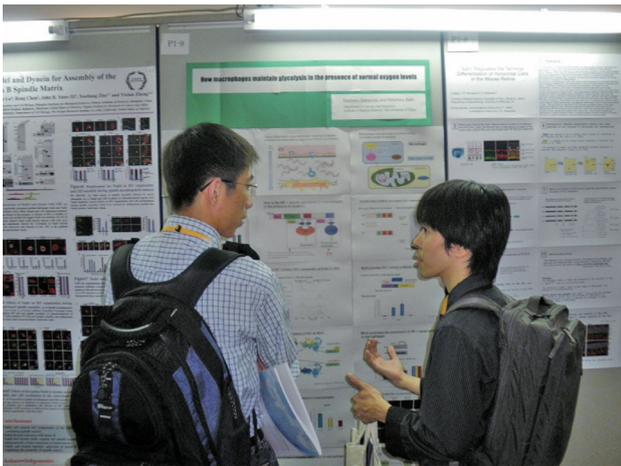
9月12日（土）～9月15日（火）の4日間、京都大学ウイルス研究所の主催で第16回東アジアシンポジウム（於：京都大学医学部芝蘭会館・稲盛ホール）が開催された。本来6月末に開催予定だったが、新型インフルエンザの影響により9月に延期となった。

このシンポジウムは、東アジアにおける優秀な若手研究者の交流を深めることを目的としている。本年は、東大と京大の他に韓国成均館大学校（SBRI）、中国科学院上海生物化学細胞生物学研究所（IBCB）、国立台湾大学医学院生物化学分子生物学研究所（IBMB）、ソウル大

学校分子生物学遺伝学研究所（IMBG）の計6機関が参加し、各機関からはそれぞれ教員4名と大学院生及びポスドク5名が参加した。

シンポジウムは教員による20分間のプレゼンテーションと大学院生及びポスドクによる5分間のプレゼンテーションとポスター発表によって構成されている。全員参加型のため、異なる分野の最新の研究内容を相互に理解できるという利点がある。発表の内容は皆とてもハイレベルで、プレゼンテーションの仕方も工夫されており、大変刺激を受けた。また、恒例として大学院生またはポスドクの優秀発表者には本シンポジウムに寄附を頂いている「トミー精工株式会社」より賞品が贈られ、本年は中国科学院 IBCB、京大、成均館大学の学生らが表彰された。

セッション後の懇親会でも、引き続き国境を越えた有意義なディスカッションをすることができた。参加者全員の研究内容を理解できたことが、ディスカッションの盛り上がりの要因の一つであったように思う。そして最終日の京都半日観光ツアーでもさらに参加者同士の交流を深め、本年も大成功のうちに幕を閉じた。来年は国立台湾大学主催で行われる予定である。



ポスターの前で説明をする参加者



フェアウェルパーティでの集合写真

大学院農学生命科学研究科・農学部

「平成21年度自衛消防隊操法大会」

で念願の初優勝！

9月18日（金）の午後、御殿下グラウンドで行われた「自衛消防隊操法大会（主催：本郷消防署）」において、農学部自衛消防隊（利根川伸一隊長：経理課、浜田誠司隊員：経理課、植木光秀隊員：安全衛生管理室）が優勝した。

農学部として消防隊を結成して以来、3年目にして快挙を成し遂げた。

当日は、環境安全本部から小山富士雄副本部長、白勢祐次郎統括長、農学部からは高橋勝彦安全衛生管理室副室長、井上幸太郎事務部長らが見守る中、本郷消防署管内のホテルや企業、大学などの自衛消防隊（男子隊22チーム、女子隊4チーム）が操法を競い合ったが、当チーム3名はほぼ完璧な自衛消防隊操法をくりひろげ、みごと頂点に立った。

当チームは、日頃からの研鑽は勿論のこと、本大会への出場が決定してからは、連日うだるような暑さのなか、昼休みや仕事が終了してからの時間を利用して練習に励んでいたことが成果として結びついた。

表彰式では、本郷消防署長から農学部自衛消防隊に対して、優勝の表彰状、盾、メダルが贈呈され、また併せて高い評価の言葉があった。



操法大会中の農学部自衛消防隊



メダルを胸に喜ぶ隊員

（左から植木隊員、利根川隊長、浜田隊員）



表彰式後の記念撮影（関係者らと）



会場の様子

東洋文化研究所

奈良国立博物館との合同講座「悟りの世界・煩惱の世界～東洋文化研究所の漢籍をめぐる～」を開催

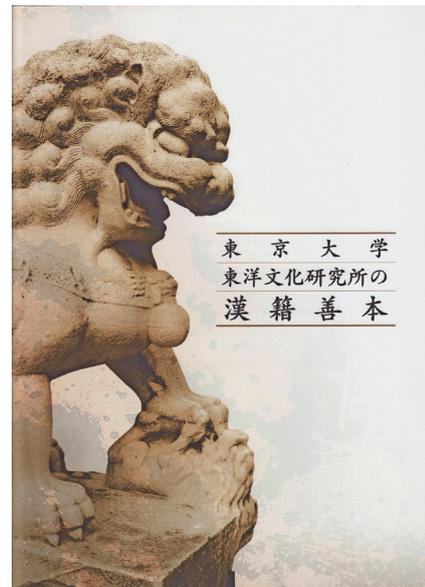
9月21日（月・敬老の日）に奈良国立博物館において、同館と東洋文化研究所との合同講座「悟りの世界・煩惱の世界～東洋文化研究所の漢籍をめぐる～」が開催された。

当日は地元の一般市民など約100名が集まる中、東洋文化研究所の教員2名が、それぞれ「悟りの世界：仏典の翻訳工房」「煩惱の世界：悲恋の中国文学」と題して、漢籍にまつわる講演を行った。

この合同講座は、奈良国立博物館で特集展示「東京大学東洋文化研究所の貴重図書」（会期：9月15日～10月4日）が開かれるのにあわせて企画したものである。特集展示の開催が地元の複数の新聞にとりあげられたこともあいまって、東洋文化研究所が所蔵する貴重な漢籍資料の前で足を止めて見入る来館者の姿が、数多く見受けられた。

また、今回の企画にあわせて、展示品を中心とする所蔵漢籍善本を取めた図録「東京大学東洋文化研究所の漢籍善本」を制作した。この図録を、特集展示の見学者や合同講座の聴講者へ向けて配布したところ、好評を得ることができた。

東洋文化研究所では、今後も貴重な所蔵資料や研究成果を、広く社会に向けて発信していきたいと考えている。



図録「東京大学東洋文化研究所の漢籍善本」

大学院工学系研究科・工学部

「グローバルCOE拠点連携会議」で若手研究者交流を推進

グローバルCOEプログラム「機械システム・イノベーション国際拠点」と「都市空間の持続再生学の展開」2拠点の共同企画による、「第1回機械・土木・建築グローバルCOEプログラム拠点連携会議」を9月25日（金）、本郷キャンパスにて開催した。

グローバルCOEプログラム（GCOE）は国際的に卓越した教育研究拠点の形成を目的とした制度で、「機械・土木・建築・その他工学」分野では東大の2拠点を含め全国で14拠点が採択されている。各拠点の研究テーマは異なるが、若手研究者の育成については共通の課題や相互に参考となる取組が多いと考えられることから、拠点間交流を呼びかけたものである。各拠点のリーダー級の教員や若手研究者など、全国から総勢60名余りが一同に会し、拠点の取組や若手育成のプログラム、運営上の課題、GCOEの制度への要望などについて意見交換を行った。

会議では特に若手研究者からの活発な発言が目立った。GCOEの良さとして専門の幅が広がることが認識されている一方、従来型の専門研究とGCOEとのギャップに負担を感じる場合があることなど、GCOEの運営上参考となる意見が聞かれた。さらに、GCOE終了後のキャリアパスに不安があることや、女性研究者が研究を続けられる環境作りの必要性など、研究者の育成・輩出に関する本質的な議論が交わされた。

この会議は、今後、各拠点での成果やGCOE制度の改善要望の発信の場としたいと考えている。また、専門領域を越えた若手研究者の交流実現はより重要な狙いであり、次回以降は若手研究者を主体として企画・運営を進め、拠点間のネットワークを強化していく予定である。



各拠点の取組状況発表と質疑



若手研究者からの発言が相次ぐ



会場（工学部2号館）前での参加者記念撮影

読者投稿写真 No.4

9月に満開のモクゲンジ



本郷キャンパス赤門に入って医学部2号館本館に向かう銀杏並木の先、経済学部（赤門総合研究棟）の角にある樹が、9月上旬には一斉に黄色い花で覆われて一変します。夏に黄色い花の咲かせる木は少なく、しかも大きい木とあって、遠くからでも目につきます。フクロミモクゲンジという樹だそうです。辺りには黄色い花が舞い落ちています。一つ一つ

の花は小さいのですが、アップにしてみると花托の周囲が朱色になった可憐な花です。これから花が終わると、ブーゲンビリアの花びらに似た袋の果皮が鈴なりになり、それもまた奇麗です。

（撮影：理学系研究科 教授 柴橋博資さん）

※この連載では、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースを、当センターの取り組みの様子、活動状況など共にご紹介していきます。

高齢者標準の社会へ

65歳以上の高齢者の2/3は医療や介護を必要としておらず、健康人口に含まれます。ただ、加齢に伴い体力や認知能力が徐々に低下することは避けられません。

高齢者が安心して、しかもアクティブに暮らすことが出来るような社会を作るためには、低下した体力等を標準として、それを補う多様な仕組みを導入する必要があります。

政策ビジョン研究センターでは、下記のような観点から研究を進めています。

これらの研究から、高齢化社会の日本モデルを創造し、日本に遅れて高齢化を迎えるアジア諸国にも発信していくことを目指しています。

- ・ 高齢者の生活を見守る市民後見制度の導入
- ・ 高齢者標準の住宅・移動環境づくり
- ・ 医療のIT化による健康管理システム
- ・ 安心安全な地域医療システム

政策ビジョン研究センターでは、現代社会が直面している政策課題について、学内の教職員、大学院生、学外の関係者、客員研究員などによる研究会を「PARI政策研究会」と題し、定期的で開催しています。高齢化社会に関しては、



PARI政策研究会（2009年4月20日実施）

<http://pari.u-tokyo.ac.jp/column/column09.html>

…階段を上れるが下りられない高齢者が、どうしても下り階段を下りなければならない時にはどうするかと言えば、手すりにつかまって後ろ向きに階段を降りることになります。私は、都心の駅で、後ろを振り返りながら恐々と階段を降りる高齢者の姿を見ると、これが本当にバリアフリーの進んだ社会なのかと嘆かわしく感じてしまいます。

すでに我が国は世界ではじめて65歳以上人口が総人口の21%を超える「超高齢社会」に突入しており、バリアフリー政策は喫緊の課題であることは明らかです。バリアフリーを目的として設置された施設・設備は、利用対象者が高齢者や障害者であることから、設置の効用を検証することは困難なことも確かです。しかしエスカレーターは下りの方がバリアフリーには役立つということは、上記のように明らかなのです。…

中島 勲 政策ビジョン研究センター 協力教員
HPコラム：「上りより下り、高齢者のエスカレーター」より抜粋

当センターとしても最重要課題の1つと位置づけており、これまでに下記の通り、合計4回の研究会を開催いたしました。各回の議事レポートは当センターホームページ上にて、ご報告しています。是非ご覧ください。

持続可能な福祉社会の構想～福祉政策と環境・都市政策の融合

【日時】 2009年4月20日（月）10:00-12:00
【講師】 広井 良典 教授（千葉大学教授）

行政実務経験者からみた日本の社会保障政策の構図と展望

【日時】 2009年5月18日（月）18:00-20:00
【講師】 辻 哲夫 教授（東京大学高齢社会総合研究機構教授）

市民後見による地域福祉経済の活性化

【日時】 2009年9月04日（金）18:00-20:00
【講師】 宮内 康二 助教（東京大学医学系研究科特任助教）

医療分野におけるIT化の将来

【日時】 2009年9月08日（火）16:30-18:30
【講師】 秋山昌範 教授（東京大学政策ビジョン研究センター教授）

第1回アジア知財学術カンファレンス

【日時】 2009年11月12日（木） 【場所】 京都大学 芝蘭会館
【主催】 日本知財学会、東京大学（政策ビジョン研究センター等）、京都大学

今注目されているグリーン・イノベーション等の戦略分野では、学術と産業技術がますます接近することが予測されています。それを踏まえ、特許制度やその運用、産学連携のあり方、大学側の知的財産管理や活用戦略について、再検討する必要に迫られています。地球環境問題や社会の高齢化等の人類が直面する課題解決に向けて、学術研究の成果が社会において、より迅速かつ広く活用されるような新たな知的財産システムを構築していく必要があります。

この状況は我が国のみならず、韓国や中国等のアジア諸国においても同様です。そこで、国内やアジアの大学の知的財産関係者が京都大学に集まって、ラウンドテーブル方式でこうした問題について議論を深めることと致しました。このような「場」は初めての試みとなります。このカンファレンスは、6月に開催した「イノベーション

における競争と協調一次世代の特許制度を考える」に引き続いて東京大学（政策ビジョン研究センター）と京都大学が協力し、内閣官房知的財産戦略推進事務局、日本知財学会、韓国産業財産権協会、中国知識産権協会、大学技術移転協会、日本学術会議知財委員会、特許庁、東京工業大学、金沢大学等が参加する予定です。

ここでの議論の成果は、同日の午後開催される「日米欧3極特許庁長官との対話会議（拡大ユーザーカンファレンス、於京都市）」において、さっそく報告され、討議の対象となる予定です。

このユーザーカンファレンスは、過去、特許庁のトップと産業界のトップにより開催をされました。制度のユーザーとしての大学の役割が高まっているとの我々の提言（「未来を創造する特許制度のための15の提言」）を踏まえ、今回初めて、大学を含めた会議となったものです。

政策ビジョン研究センター 1周年記念フォーラム

10月28日（水）、東京大学工学部にて、政策ビジョン研究センターの1周年記念フォーラムを開催いたしました。新政権が発足し、「政治」から「政策」へとギアチェンジをするべき節目の時期に、当センターが蓄積した研究成果や研究途上の調査結果等を取りまとめて発信する機会となりました。

プログラム前半は、濱田純一総長の基調講演に続いて、当センターの研究成果として、高齢者社会、医療政策、知的財産権制度、北東アジアの安全保障、技術ガバナンス、航空政策などの取り組みが紹介されました。

後半のパネルディスカッションでは、濱田総長、増田寛也元総務大臣のほか、自民党、民主党双方からの国会議員の方々も加わり、活発な議論が交わされました。この内容は次号にて、詳しくご報告させていただきます。

INTERVIEW

総括プロジェクト機構
「航空イノベーション」総括寄付講座
代表 鈴木 真二 教授
(大学院工学系研究科)

空路による国内移動が珍しくはない昨今ですが、国産旅客機の開発について耳にした人もいないと思います。今回は旅客機よりも一足先の2009年8月に誕生した、日本の航空の将来を見据える寄付講座を紹介し、「航空イノベーション」総括寄付講座代表の鈴木真二先生の目は天空のように明るく輝いていました。

Q. 誕生して2ヶ月、発足の経緯や目的は？

鈴木 MRJという国産旅客機の開発が2008年3月から約半世紀ぶりに進められています。旅客機の開発には膨大な時間と費用、エネルギーが必要なため、第二次世界大戦後に初めて日本のメーカーが開発した旅客機であるYS-11の開発以降、日本はパートナーとして海外の大型旅客機などの共同開発・生産に関わってきました。今回の国産旅客機開発は、次世代の先端産業としての期待もありますが、同時に、関連する様々な課題整理や克服、人材育成も必要になってきます。旅客機は良い物を作れば売れるというものではありませんので、2008年6月に航空機製造、運航、装備品、官界、研究機関からなる航空イノベーション研究会を本学に設置し、月1回の研究会を開いてきました。こうした活動に加えて、航空機製造販売事業を推進させるためには、国際的な条約とそれに基づく国内法整備、財務・金融面での仕組みづくり、国際的な各種ルールの理解と提案が必要であるため、2009年8月に「航空イノベーション」総括寄付講座が三菱重工業(株)の寄附により発足しました。



「航空イノベーション」総括寄付講座 鈴木代表

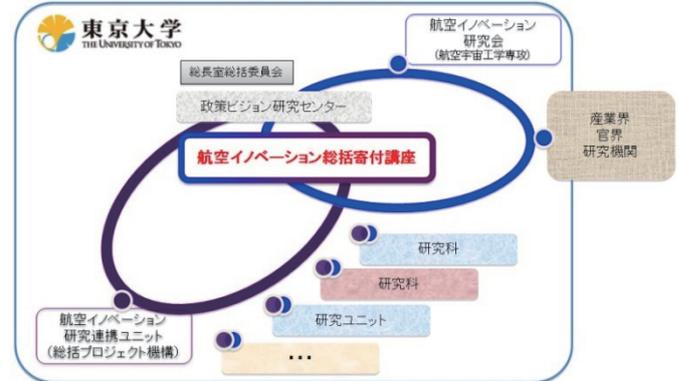
航空に関するイノベーションを航空工学、航空政策、航空経済など航空に関連する学内の知を結集して研究し、その成果を発信することで、航空産業の創成と空の有効活用の達成に貢献したいと考えております。

Q. 講座の現在の状況や取り組むべき課題は？

鈴木 「飛行機」と一言で言っても膨大な量の部品や素材から出来ており、その数は100万点にも及び、それらが地球上を膨大な数で昼夜を問わず管理されながら飛び回っていますのでシステムオブシステムズと称されています。つまり、航空は制度的にも技術的にも極めて複雑で巨大なシステムに支えられているため、多岐にわたる課題も発生します。安全性は勿論ですが、国内的には成田・羽田空港の拡張問題、MRJの開発、陸運との競争、国土交通網整備、環境配慮等の諸問題が、国外的には特にアジアでの航空輸送の増加、低コスト航空会社の出現、本体や部品の開発・調達競争、燃料価格の変動、地球規模の環境問題などの様々な課題が存在しているため、現在は転機を迎えていると言えます。例えば、飛行機を作ることができても、安全性を保障されないと、売ることすら使ってもらえないのです。こうしたことは技術面だけではなく、政治面、国際面でも問題になってきます。また、京都議定書では盛り込まれなかった国際航空分野のCO₂排出も議論されています。そのような諸課題を議論する際には、航空に携わる人の教育、ソフトやハードのシステムなど周辺部分へのサポートや、ICAO(国際民間航空機関)のような国際的な枠組みも重視しなくてはなりません。このような諸課題への対応は、日本としても必要不可欠です。

総長室総括委員会とは？

総長室の下に設置された、室、本部、機構といった組織をまとめる、本部における教授会のような役割を担っています。
総長室総括委員会HP: <http://cirp.u-tokyo.ac.jp>



本寄付講座は、連携組織の特徴を活かし、こうした課題を整理分析し、学内の各研究科、政策ビジョン研究センター、イノベーション政策研究センター、ものづくり経営研究センターや学外諸機関と広範な連携をとって発信していきたいと考えています。

Q. 本寄付講座を運営して感じていることは？

鈴木 この夏にエアバス社との航空サマーセミナーを開催した時に、航空機開発販売事業は技術だけでなく、市場性、経済性、生産性との総合的な判断でグローバルに推進され、事業の時間的な推移も大変重要であることを実感できました。また、その企業ではスタッフの出身が40ヶ国程になるそうで、本部がフランスにありながら、社内標準英語を定めて使用していると聞きました。グローバルな中でしっかりと発言ができ、長期展望とグローバルな視野で、グローバルに活躍できる人材育成が重要と認識しております。

Q. 今後の抱負は？

鈴木 ライト兄弟の初飛行から100年経ち、「より速く」、「より高く」、「より遠く」を目標に驚異的な発展をとげましたが、今後100年は「より安全に」、「より環境に優しく」、「より便利に」という新たな目標を目指しているといえます。こうした分野に関しては日本が技術的に強いものを持っています。世界に発信し、国際的な枠組みの中で日本のプレゼンスを高め、航空の発展に貢献できるようにすることが必要だと思っています。そのためにも国内の仕組みや制度のグローバルスタンダードとの隔たりの是正やグローバルな仕組みづくりのための国際的な交渉能力の獲得に努めなくてはならないと考えております。

今、ボーイング社等との騒音問題のワークショップを準備しています。また、今年は、日本人が乗ったグライダーが初飛行して100年にあたります。フランス人と日本海軍大尉と本学の田中館愛橘教授が農学部グラウンドからグライダーを飛ばしたそうですので、その記念行事を計画しています。飛行機は人々の夢や憧れともいえますし、研究には文化的な色付けも欠かせないと思っています。

(インタビュー: 矢島・清水)



鈴木代表(中央)と寄付講座のメンバーである岡野特任准教授(左)と中村特任研究員(右)

● 関連ホームページ ● 現在製作中

問い合わせ先: 本部研究機構等支援グループ (内線20484)

景気が低迷する時期にこそ 起業やベンチャー投資を 第1回起業・大学発ベンチャーセミナー開催



写真上: 産学連携本部事業化推進部の長谷川克也特任教授(左)と、東京大学エッジキャピタルの村上輝好氏(右)。写真下: 参加者との質疑応答の様子。

9月10日(木) 産学連携本部2階大会議室にて、2009年度の第1回目となる東京大学起業・大学発ベンチャーセミナーが開催されました。前半は産学連携本部事業化推進部の長谷川克也特任教授が「オープンイノベーション時代の大学発ベンチャー」をテーマに講演しました。会社の枠を越えて行うオープン・イノベーションという発想で、大企業と大学発ベンチャーの協業(買収を含む)という問題提起がなされました。

後半は東京大学エッジキャピタル(UTEC)の村上輝好氏が「東京大学エッジキャピタルによる創業支援とマイルストーン投資」をテーマに講演しました。UTECのマイルストーン投資(シード・アーリーステージからExitを見据えた投資、IPO・M&AでのExit、ステージごとの投資など)について説明がありました。また日米ともに景気が悪い時期に設立されたファンドのほうが相対的には高いリターンを得ているという事実があるので、ベンチャーへの投資は今がチャンスという考え方もできると述べられました。

講演後、約60名の参加者からは多くの質問が寄せられ、演者と活発なやり取りが交わされました。本セミナーが期待した「一方通行の講演会ではない、双方向コミュニケーションの場」が実現しました。

「複雑系科学技術」の現状と将来を 各分野の第一線の研究者が解説 第16回科学技術交流フォーラム開催

9月7日(月) 東京大学本郷キャンパス山上会館2階大会議室において、第16回科学技術交流フォーラム「複雑系科学技術—複雑さに挑み、複雑さを活かす科学技術へ向けて—」が開催されました。本フォーラムの企画にご尽力頂いた合原一幸教授(生産技術研究所)のイントロにはじまり、前半は脳科学・自己組織システムの観点から、脳デザイン、機械学習、複雑系コンピューティング、脳回路活動の創発等を中心とした講演でした。

休憩をはさんで後半は、数理モデルを基礎とした複雑系生物学、新型インフルエンザのモデリング、癌治療等のテーマのほか、時系列データからの情報抽出、金融危機と複雑性など科学技術への応用を中心とした講演でした。約170名の参加者からは演者への質問も活発で、特に「新型インフルエンザ」や「金融危機」など、報道で取り上げられる頻度の高いテーマは多数の質問が寄せられました。フォーラム終了後、1階ラウンジで行われた交流会では、産業界からの参加者が、演者に直接質問をしている姿があらわに見られ、注目の高さがうかがわれました。

本フォーラムから「複雑系科学技術」をテーマとした産学官の共同した取り組み(研究会やコンソーシアム)が形成されることを期待します。



写真上: 参加者から合原一幸教授(生産技術研究所)に質問が寄せられた
写真下: 補助のパイプ椅子が満席になるほど多数の参加者が集まった

東京大学産学連携協議会運営本部主催 第17回科学技術交流フォーラムのお知らせ

日時: 12月17日(木) 13:00~(予定)

会場: 【フォーラム】東京大学 山上会館2階大会議室 【交流会】東京大学 山上会館地階会議室001

テーマ: 太陽光エネルギー利用の未来~大規模太陽光発電システムに向けた技術開発の現状と展望~

定員: 150名/事前申込制 申込: 右アドレスのサイトより先着順 <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/kyogikai/forum/>

申込締切: 12月11日(金) 参加費: フォーラム無料、交流会3千円

連絡先: 産学連携本部(本部産学連携グループ)
電話: 内線22857(外線03-5841-2857)
WEBサイト: <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo



インタープリターの2つのタイプ

藤垣裕子

総合文化研究科 准教授

科学技術インタープリター養成プログラム担当

科学技術インタープリター養成プログラムも今年で5年目を迎える。大学院の副専攻として志望してくる学生の面接をしていて、ふと、気付いたことがあった。「中高生に科学をわかりやすく伝えたい」と考えるタイプの学生と、「目の前にある自分の研究課題において、研究成果を実際に使うことになるひととのコミュニケーションをどうとるか」ということに関心を持っているタイプの学生の2種が存在することである。

なるほど、理科離れなどが指摘されている現在、自らが理科好きで中学高校時代をすごした学生は、自分こそが理科をわかりやすく伝える工夫ができるはず、と思うのだろう。さまざまな夢を語ってくれて興味深い。こんな工夫ができるのではないか、出張授業をやってみたい、などなど。自分の経験をもとに、自分より若いひとにわかりやすく伝えることは、インタープリターの大事な側面である。この場合、理科教育の現状を分析し、自分の考える工夫がそのなかでどう位置付けられるのか(あるいは位置付けられないほどユニークなのか)などを考える必要がある。

しかし、インタープリターの役割はそれだけではない。ある農作機械を開発して、それを農家のひとに使うためには、農家のひとがどのような機械を求めているかを知る必要があり、農家のひととのコミュニケーションが欠かせない。また、都市環境を研究する上で、地域のひととのコミュニケーションは、現場に足のついた研究をする上で欠かせない。こういった、目の前にある自分の研究課題において、研究成果を実際に使うことになるひととのコミュニケーションをどうとるかも、インタープリターの課題の1つである。

研究者の社会的リテラシーとは、「自分の研究が社会に埋め込まれたとき、社会のなかでどのように展開していくだろうか」という点に考えが及ぶ能力」を指す。具体的には、自分のやっている研究の社会における位置付け、研究が社会に活用されたときにどのようなことがおこりうるか考えられる能力、自分の出したデータがどのように一人歩きするのかについて考えられることである。このような社会的リテラシーのためには、自分の研究成果を使うひととのコミュニケーションが必要不可欠となる。中高生にわかりやすく伝えることだけでなく、自らの研究の意味を他分野の成人とともに考える。後者のほうが苦手なひとは多い。何故なら、後者に本気で取り組み、自らの変容が求められるからである。

★科学技術インタープリター養成プログラム

URL:<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>

潤滑油役だけど……



デスクにて

「経理関係各係の業務が円滑に遂行できる調整（潤滑油）」をお仕事として医学系事務へ4月に内部異動してから、6ヶ月目が無事？に経過しようとしています。東京大学は国立大学法人になって以降、国からの紐付きの外部資金でない限り国の法令等の規制を直接的には受けない機関になり、不正な会計行為以外は執行の自由度が増し、教員発注も認められるようになりました。ただし、調達までの基本的な考え方が少し曖昧なために、各部局の執行方法も微妙に違った処理方法を採用しており、また職員も国の時代のような考えの人もいれば民間的な考えの人もいて双方の意見が食い違ったときに、どちらの考え方を尊重して業務を遂行していくのか、実生活で嫁・舅の間に入らされて苦しんでいるのと同様の調整（潤滑油）が増えて胃が痛む今日この頃です。



実は先月、娘の結婚式がありました。この写真、ちょっと緊張しております

得意ワザ：早起き

自分の性格：楽道家

次回執筆者のご指名：松峯正典さん

次回執筆者との関係：趣味仲間

次回執筆者の紹介：陽気な酔っ払い

■秋のイベント出店予定！

今年もやってきましたイベントの秋！！本郷キャンパスを飛び出し、なかなかお会いできない皆様に会いに参ります！！

■10月30・31日 柏キャンパス一般公開

柏キャンパス初出店です！図書館内、来場者受付横にて出店致します！大人から子供まで楽しめる企画が満載の一般公開、どんな賑わいになるのか楽しみです。

柏キャンパス教職員のみなさまもこの機会に是非コミュニケーションセンターの雰囲気を感じて下さい！

■11月21・22日・23日 駒場祭

毎年恒例！駒場祭出店、今年も会期中3日間の出店を行います！現在院生のスタッフが多いコミュニケーションセンターですが、駒場キャンパスの1・2年生の勢いに負けず、元気に出店します！



■UTCCスタッフおすすめ商品のご紹介！！



文学部言語文化学科国文学専修課程4年 松本雄哉

こんにちは！学生スタッフの松本です。今回はUTオリジナルステーションナリーの中から、僕もノートをとる時などに愛用している「ペンカバー（ボールペン付き）」をご紹介します。こちらは大変書きやすいと評判です！さらに、使いこむほどカバー部が手になじみ使いやすくなってきますので、長い間愛着を持って使って頂けると嬉しいです！また、中のボールペンのインクが無くなっても新しいペンに変えてお使い頂けるエコな商品でもあります！是非一度コミュニケーションセンターでその感触を試してみてください！！

■ペンカバー（ボールペン付き）白・黒 各 840円 (担当：UTCC 吉岡)



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30
電話：03-5841-1039
http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp



ケータイからみた東大
～東大ナビ通信～



東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。是非、東大ナビをご活用ください！



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
- mail@utnav.jp宛てにメール送信
- 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET！



イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- http://utnav.jpにアクセス
- イベント掲載フォームから送信！
- 追ってスタッフよりご連絡致します教育企画室TREEオフィスまで！
- 内線；27823
- メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス；本郷キャンパス第二本部棟403号室

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA)

第4回国家基幹技術「海洋地球観測探査システム」フォーラム

地球観測データ統合連携研究機構では、以下のとおり第4回国家基幹技術「海洋地球観測探査システム」フォーラムを開催します。多くの方のご来場をお待ちしています。

●日時： 11月4日(水) 13:00～17:00

●場所： 鉄門記念講堂

●主催： 文部科学省、宇宙航空開発機構、
海洋研究開発機構、東京大学

●背景：

国家基幹技術「海洋地球観測探査システム」は、衛星による全球的な観測・監視技術と深海底下までをカバーする海洋探査技術により得られる各種データを効果的に統合し、社会的・科学的に有用な情報に変換して提供するシステムの構築を目指しています。本システムを構築し、活用することにより、我が国の地球環境観測、災害監視、資源探査などに貢献することが期待されています。本システムの構築にあたっては、様々なユーザーが必要とする情報が何かを把握するとともに、提供される情報がどのように活用され、社会還元されるかを常に念頭に置きつつ、研究開発を推進することが重要となります。

第4回フォーラムでは、地球温暖化緩和策とともに関心の高い気候変動適応型社会の実現に本システムも貢献していくため、各分野で気候変動適応に取り組む機関との意見交換を通じて本システムに対するニーズの把握を行うとともに、関係機関間や研究分野間の更なる連携を図ることを目的としています。



●プログラム：

- (1) 特別講演「気候変動適応型社会の実現に向けて」
相澤益男 (内閣府総合科学技術会議議員)
- (2) 地球環境を診断する基盤技術について
海洋地球観測探査システムの概要
森本浩一 (文部科学省大臣官房審議官)
衛星観測監視技術
本間正修 (宇宙航空研究開発機構執行役)
次世代海洋探査技術等
平 朝彦 (海洋研究開発機構理事)
データ統合・解析システム
小池俊雄 (東京大学地球観測データ統合連携研究機構長、工学系研究科教授)
- (3) 今、私たちが直面している課題について
藤田光一 (国土技術政策総合研究所)
小林睦夫 (国立感染症研究所)
横沢正幸 (農業環境技術研究所)
中川聞夫 (国際協力機構)
- (4) パネルディスカッション
「気候変動に強い社会を目指して」
モデレーター：沖 大幹 (東京大学生産技術研究所教授)
パネリスト：廣木謙三 (内閣府総合科学技術会議参事官)
講演者一同
司会者：瀧澤美奈子 (科学ジャーナリスト)
※プログラムは都合により変更する場合がございます。

●参加登録：

参加費無料。

以下のホームページからお申し込みください。

http://www.jamstec.go.jp/j/pr/event/key_tech_forum2009/

●問い合わせ：

地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA)

03-5841-6132 (内線:26132)

editoria@editoria.u-tokyo.ac.jp

<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/>

募集

募集

東京大学サステイナブルキャンパスプロジェクト (TSCP) 室

冬の省 CO₂・省エネポスターのアイデア募集!

本学では、サステイナブルキャンパスの実現を目指して、“TSCP”として、キャンパスのCO₂排出量の総量削減に向け全学的な取り組みを始めています。この取り組みの一環で、夏期と冬期において、空調の設定温度の緩和について、毎年意識啓発ポスターを制作し、全学内の建物に掲示しております。

また、今夏に制作したポスターより学生のアイデアを採用することで、学内における啓発活動の促進に貢献できればと考えております。冬期においても、引き続きこの取り組みを行いたく、以下に示すとおり広く学内よりアイデアを募集します。

◎募集対象者 本学の学生、本学教職員

◎募集内容

- 1) ポスターに記載したい内容(文面の変更可)
 - ・冬期の空調設定温度は20℃に設定してください。
 - ・光熱水費用は、皆様一人一人によって負担されています。
 - ・TSCP-2012に御協力下さい(説明文付)。
- 2) 掲示サイズ A2サイズ
(制作はTSCP室にて行ないます)
- 3) 募集〆切 11月16日(月)
- 4) 提出先 E-mail: tscp@adm.u-tokyo.ac.jp
(メールにてお願いいたします)

◎問い合わせ先

本郷キャンパス 第2本部棟2階

TSCP室(内線20500~20502)

(TSCPの詳細は、ウェブサイト

<http://www.tscp.u-tokyo.ac.jp/> をご覧ください)

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第523(10月7日)号の発行 ——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第523号の内容は以下のとおりとなっておりますので、ぜひご覧ください。

小島憲道・山影進・米谷民明・石井洋二郎・藤垣裕子・中島隆博・山脇直司・和田元・石橋純:

駒場還暦座談会(教養学部創立60周年記念)21世紀の教養のあり方

名誉教授:「訳読について」

松岡心平:博物館企画展 観世家のアーカイブ——世阿弥直筆本と能楽テキストの世界——
能楽の波動~駒場の地から~

真船文隆:高校生のためのオープンキャンパス @駒場2009

高田康成:待てばカイロの

石井直方:スポーツ・身体運動の新しい教科書
『教養としての身体運動・健康科学』

金子知適:Game Programming Seminar 将棋優勝名人への第一歩

坪井貴司:「自分」と世界

〈時に沿って〉

緒方芳子:東大の二つの学科

後藤春美:イギリスと歴史

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

駒場博物館特別展「観世家のアーカイブ—世阿弥直筆本と能楽テキストの世界—」のご案内

本年は東京大学教養学部が発足してから60周年という節目の年にあたります。これを記念して、10月10日(土)から、駒場博物館にて特別展「観世家のアーカイブ 世阿弥直筆本と能楽テキストの世界」を開催いたします。

観阿弥、世阿弥によってうちたてられた能楽は、将軍家をはじめとするパトロンや観客に支えられながら、多くの能役者たちによって、現在まで継承され、発展してきました。その中核を担ったのが、観阿弥を流祖とし、世阿弥を第二祖とする観世家の人びと、つまり歴代の観世太夫でした。観世太夫たちは、世阿弥の直筆本をはじめとするテキストを守り伝える一方、時代とわたり合い、未来に心を馳せながら自らもテキストを残し、面・装束などとともに膨大な観世家のアーカイブを形成してきました。このたび、当代二十六世観世清和氏の協力のもと、科研費による調査プロジェクトが実施され、いまここにアーカイブの全貌がウェブ上の公開という形で世界にひらかれようとしています。そうした観世家が時代とともに生きる姿を、能楽テキストを通して、目のあたりにしていただければと願っています。

会場 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館

会期 10月10日(土)～11月29日(日)

開館時間 10:00～18:00(入館は17:30まで)

休館日 火曜日(ただし11月3日は開館)

入場料 無料

問合せ先 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部
駒場博物館

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

TEL: 03-5454-6139 FAX: 03-5454-4929

関連企画

講演会

第一回: 11月9日(月) 18:30より(先着200名)
18号館ホール(東京大学駒場Iキャンパス)
観世清和(二十六世観世宗家)

第二回: 11月16日(月) 18:30より(先着100名)
18号館コラボレーションルームI(東京大学駒場Iキャンパス)
小林康夫(東京大学)・松岡心平(東京大学)

ギャラリートーク

下記の日程で土曜日14時より駒場博物館の中で行います。事前申し込みは不要です。時間になりましたら展示室入り口付近にお集まりください。

- 10月17日(土) 松岡心平(東京大学)
- 10月24日(土) 高橋悠介(神奈川県立金沢文庫)
- 10月31日(土) 磯田道史(茨城大学)
- 11月7日(土) 落合博志(国文学研究資料館)
- 11月14日(土) 横山太郎(跡見学園女子大学)
- 11月21日(土) 小川剛生(慶應義塾大学)

※関連企画はすべて入場無料

お知らせ

附属図書館

特別展示会「日本の天文学の歩み—世界天文年2009によせて—」の開催

今年は、ガリレオ・ガリレイが初めて望遠鏡を天体に向け数々の発見をなし遂げた1609年から400年目にあたるため、「世界天文年2009」と定められました。この記念すべき年を機会に、東京大学所蔵の図書と史料を中心にして「日本の天文学の歩み」を振り返ってみるのがこの特別展示の目的です。古代中国の政治・制度、法律、文化、宗教を組織的に受け入れた律令国家の頃から、第二次世界大戦の敗戦による混乱期を経て日本が復興を始めるまでの時代を扱っています。

この約1300年間を、「I. 中国天文学の時代、II. 西洋天文学の導入、III. 明治維新とお雇い外国人教師、IV. 日本人による天文学、V. 天体の物理学研究へ」の5つの時代に区分し、それぞれの時代を代表する書物、従来あまり注目されなかった珍しい史料と関連資料、約60点を展示しました。寛永14(1637)年の具注暦、天文暦学について下問した八代将軍吉宗の真筆、メンデンホールが行なった富士山頂での重力測定の話、萩原雄祐の講義を受講した畑中武夫の整然たるノートブックなど、今回初めて公開される新史料も何点か紹介します。この展示を通じて日本天文学の発展を顧み、天文学に一層のご関心を寄せていただければ幸いです。

<特別展示>

期 日: 10月23日(金)～11月25日(水)
(土・日・祝日も開催)

時 間: 9:00～18:00(11月9日は20:00まで)

場 所: 総合図書館3階(入場無料)

<記念講演会>

演 題: エピソードで語る江戸の天文学

日 時: 11月9日(月) 18:00～19:30

場 所: 総合図書館3階大会議室

(入場無料・申込不要)

講 師: 中村 士^{つこう} 帝京平成大学教授

お問合せ先: 附属図書館情報サービス課・専門員

Tel 03-5841-2640

お知らせ

情報基盤センター

11月は「秘書さんのための講習会」を開催 “情報探索ガイダンス”各種コースのご案内

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを開催しています。

実習を交えた、わかりやすい説明で好評です。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どんなでも参加できます。ぜひご参加ください。

●日程・コース概要：

■ 11/4(水) 11:00～12:00 日本の論文を探すには？

日本国内の雑誌論文の代表的なデータベース「CiNii」(サイニイ)の使い方を中心に解説します。

■ 11/10(火) 12:10～12:30 自宅から検索するには？(20分のワンポイント講習会)

自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ、知りたい。そんな方にお奨めなのが、このコース。ECCS アカウント認証による SSL-VPN Gateway サービスを紹介します。

■ 11/12(木) 13:30～15:00

秘書さんのための論文の探し方講習会【11月限定】

研究補助を担当されている教職員(短時間勤務有期雇用職員含む)が主な対象です。

電子ジャーナルで論文を入手する方法、各種文献データベースの使い方のほか、その場でリクエストに応じながら、じっくり説明します。

■ 11/13(金) 16:00～17:30(30分延長じっくりコース)

■ 11/24(火) 16:00～17:00

文献リストをサクッと作成～RefWorksを使うには～

Web上で使える文献管理ツール「RefWorks」の基本的な使い方を説明します。データベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。

(2回とも同じ内容ですが、11/13は30分延長します。じっくりマスターしたい方にお奨めのコースです。)

■ 11/19(木) 13:30～14:30 電子ジャーナルで論文入手

ScienceDirectなどの電子ジャーナルサイトを例にとって、利用方法を解説します。また、「UT Article Link」(東京大学学術論文リンク)を使って、データベース検索結果から電子ジャーナルへアクセスする方法も紹介します。

■ 11/25(水) 15:00～16:00 文献検索早わかり

図書、電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各種文献の探し方を、まとめてコンパクトに実習します。

■ 11/27(金) 16:00～17:30

Webで文献の「検索」から「整理」まで

～Web of Science + EndNote Webコース～

Web of Scienceは、全分野の主要学術雑誌に掲載された論文のデータベースです。通常のキーワード検索に加え、引用文献を手がかりとした検索も可能です。

後半は、Web上で使える文献管理ツール「EndNote Web」の基本的な使い方を実習します。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー

●参加費：無料

●予約不要

各回先着12名。直接ご来場ください。

●ご希望の内容で。オーダーメイドの講習会も受付中。

ご希望の内容、日時、会場などに応じたオーダーメイドの講習会を承っています。

卒論指導や進学予定者のガイダンスなど、授業の1コマや、ゼミなどにご活用ください。

ご希望の内容、日時、会場、人数、連絡先を、メールで下記までご連絡ください。(無料)

出張講習会については、下記サイトをご参照ください。

<http://www.dlitc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>

●講習会やデータベース情報などを見逃さないために。Litetopi メールマガジン発信中。

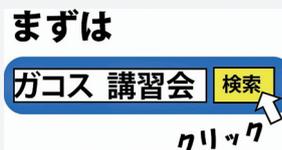
当係発行のLitetopi(リテトピ)メールマガジンは、本学所属の方を対象に、各種データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記までメールでご連絡ください。(無料)

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dlitc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>



月	火	水	木	金
11/2	11/3	11/4 11:00 - 12:00 日本の論文	11/5	11/6 16:00 - 17:00 ※留学生 (中国語)
11/9	11/10 12:10 - 12:30 自宅から	11/11	11/12 13:30 - 15:00 秘書さん	11/13 16:00 - 17:30 RefWorks
11/16	11/17	11/18	11/19 13:30 - 14:30 電子ジャーナル	11/20
11/23	11/24 16:00 - 17:00 RefWorks	11/25 15:00 - 16:00 早わかり	11/26	11/27 16:00 - 17:30 EndNoteWeb

※ 本号の記事「中国語による「留学生向け情報探索ガイダンス」のお知らせ」(27ページ)を参照

お知らせ

情報基盤センター

中国語による「留学生向け情報探索ガイダンス」のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、中国人講師による「留学生向け情報探索ガイダンス」を開催します。内容は、レポート・論文作成に役立つ、データベースを使った図書や雑誌論文の検索実習です。入門的な内容ですので、新入学の留学生に限らず、初心者の方の参加も歓迎です。本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー

●日時：11/6（金）16：00～17：00

詳細は下記のサイトをご覧ください。

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/c/training-c.html>

●参加費：無料

●予約不要

各回先着12名。直接ご来場ください。

●問い合わせ：

学術情報リテラシー係

03-5841-2649（内線：22649）

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お知らせ

大学院人文社会系研究科・文学部、大学院教育学研究科・教育学部、大学院理学系研究科・理学部

進路セミナー「『学校の先生』という仕事」開催のお知らせ

これから先生になりたい、将来なるかもしれないと、教職に興味を持っている学生を対象に、本学卒業の現役の「学校の先生」を招き、下記のとおりセミナーを開催します。

現場の生の声を聞くことができる良い機会ですので、関心のある学部生（駒場1、2年生を含む）、大学院生の皆様は、是非ご参加ください。

日時：11月11日（水）18：00～19：30

会場：本郷キャンパス 小柴ホール（理学部1号館）

【お問合せ先】

文学部教務係（内）23713



お知らせ

気候システム研究センター

一般公開講座 2009「気候研究の20年—その黎明期から地球温暖化・環境変化の時代へ—」のご案内

本講座では、ここ20年間にめざましい進展を遂げている気候の研究について、これまでの道のり、得られた知見や今後の展望などを、一般の方々を対象にわかりやすくご紹介します。これまで気候や気候研究にあまり馴染みのなかった方も、ぜひお気軽にご参加ください。

【日時】11月17日（火）

【会場】東京大学本郷キャンパス安田講堂

【プログラム】

開場 13：40～14：30

第1部 14：30～15：55 講演会

司会：気候システム研究センター准教授／佐藤正樹

気候システム研究センター長・教授／中島映至

「気候研究の20年」

気候システム研究センター教授／高橋正明

「風とオゾンを巡って」

気候システム研究センター准教授／渡部雅浩

「変わりゆく気候、変わりゆく気候研究」

休憩 15：55～16：15

第2部 16：15～17：00 パネルディスカッション

「次世代の気候研究の展望」

司会：佐藤正樹

パネリスト：中島映至、高橋正明、渡部雅浩

【参加費】無料

【定員】500人

【お申し込み】

(1) ウェブページから

<http://www.ccsr.u-tokyo.ac.jp/~k-koza/index.html> にアクセスし、必要事項を入力して下さい。

(2) FAXにて

11月9日（月）までに以下の番号に、住所、氏名、所属、

電話番号、FAX 番号、メールアドレスの情報を FAX でお送り下さい。

FAX：04-7136-4375

(一般公開講座「気候研究の20年」係)

(3) 往復はがきにて

往復はがきの返信部分に住所、氏名、所属、電話番号、メールアドレスを記入し、下記の宛先まで郵送して下さい(11月9日(月)必着)。

宛先：〒277-8568 千葉県柏市柏の葉5-1-5 東京大学柏キャンパス総合研究棟204号室 一般公開講座「気候研究の20年」係

※会場の都合により、定員に達した時点で受付を終了させていただきます。

※お知らせ頂く個人情報は、本件に関する諸連絡以外には使用しません。ただし、今後気候システム研究センターが主催するイベントの情報をお送りさせて頂く場合があります。

【お問合せ】

東京大学気候システム研究センター

電話：04-7136-4372 (松崎)

FAX：04-7136-4375

E-mail：megumi@ccsr.u-tokyo.ac.jp



お知らせ

大学院教育学研究科・教育学部

第5回公開講座「自らを傷つける子どもたち ～自傷行為の理解と予防に向けて～」のご案内

教育学研究科附属心理教育相談室(室長 中釜洋子教授)では、心理臨床の現場で向き合っている様々なケースのなかで、当相談室でも受けることがある問題を広くご理解いただきたいと考え、毎年秋に公開講座を開催しております。5回目となる今回は、青少年の問題行動としてしばしばとりあげられる、自傷行為をテーマとする予定です。自傷行為は、リストカットなど自分で自分の身体を傷つける行動であり、自殺との関わりも論じられることがあります。今回の講座では、自傷行為の研究と臨床活動に携わってこられたお二人の先生の講演に加え

て、本学教員もまじえたディスカッションなどを行うことになっております。教育現場、医療現場等に関わる専門家の方々だけでなく、この問題に関心のある学生、研究者、ご両親などにぜひおいいただき、共にこの問題に対する理解を深める機会にできたらと考えております。

日時：11月21日(土) 14:00～17:00

場所：本郷キャンパス内 小柴ホール

プログラム(敬称略)：

○挨拶

中釜洋子(本学教育学研究科教授/心理教育相談室室長)

○講演「自傷の背景とプロセス」

松本俊彦(国立精神・神経センター精神保健研究所 自殺予防総合対策センター/精神保健計画部 自殺実態分析室長)

○講演「自傷の再発予防と回復」

林直樹(都立松沢病院精神科部長)

○ディスカッション「自傷行為の理解と予防に向けて」

林直樹

松本俊彦

高橋美保(本学教育学研究科専任講師)

定員：180名(要事前予約)

入場料：無料

申込期間：10月1日(木)～11月15日(日)

(定員に達した場合には終了)

申込方法：

●ホームページよりオンラインで

PC：<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/soudan/>

携帯：<http://www.wapapa.jp/p/>

※携帯電話からは、下記のバーコードから申込ページへのアクセスも可能です。



●FAX：03-3818-0459(申込専用・24時間受付)

記載事項：氏名・氏名フリガナ・電話番号・FAX番号・職種

問い合わせ：TEL 03-3818-0439(平日10～16時)

お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

第37回東京大学農学部公開セミナー

大学院農学生命科学研究科・農学部では、以下の要領でセミナーを開催します。無料で、どなたでも参加できます。多くの方のご来場をお待ちしています。

第37回 東京大学農学部公開セミナー

『生物情報を活用した新しい農学研究 —インフォマティクスの身近な話題への応用—』

司 会：応用生命工学専攻 清水 謙多郎 教授
 講演者：附属水産実験所 鈴木 讓 教授
 応用生命化学専攻 篠崎 和子 教授
 生産・環境生物学専攻 難波 成任 教授
 応用生命工学専攻 清水 謙多郎 教授

日 時：11月28日（土）13：30～16：30

場 所：東京大学弥生講堂・一条ホール
 東京都文京区弥生1-1-1
 地下鉄南北線「東大前」下車 徒歩1分
 地下鉄千代田線「根津」下車 徒歩7分

対 象：一般（どなたでも参加できます）

定 員：300名（当日先着順、事前登録不要）

参加費：無料

問合せ先：東京大学農学系総務課 総務チーム
 総務・広報情報担当

〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1

電話 03-5841-5484, 8179

E-mail koho@ofc.a.u-tokyo.ac.jp

※ 受講証を発行します。

ご希望の方は、120円切手をご持参の上、
 当日受付でお申込ください。

主 催：大学院農学生命科学研究科・農学部

共 催：(財)農学会

事務連絡

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

氏名	異動内容	旧（現）職等
(退 職)		
21.9.20 園池 公毅	辞 職	大学院新領域創成科学研究科准教授
21.9.30 飯野 光喜	辞 職（山形大学医学部医学科教授）	大学院医学系研究科准教授
21.9.30 角田 太作	辞 職（人間文化研究機構国立国語研究所研究部言語対照研究系長）	大学院人文社会系研究科教授
21.9.30 李 簡	辞 職	大学院人文社会系研究科准教授
21.9.30 鈴木 義人	辞 職（茨城大学農学部教授）	大学院農学生命科学研究科准教授
21.9.30 武田 重信	辞 職（長崎大学水産学部教授）	大学院農学生命科学研究科准教授
21.9.30 林 文夫	辞 職（一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授）	大学院経済学研究科附属日本経済国際共同研究センター教授
21.9.30 苅谷 剛彦	辞 職	大学院教育学研究科教授
21.9.30 木下 賢吾	辞 職（東北大学大学院情報科学研究科教授）	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター准教授
21.9.30 Webb Jason Paul	辞 職	東洋文化研究所准教授
(採 用)		
21.10.1 加藤 貴仁	大学院法学政治学研究科准教授	神戸大学大学院法学研究科准教授
21.10.1 森 臨太郎	大学院医学系研究科准教授	
21.10.1 常 森	大学院人文社会系研究科准教授	
21.10.1 KAUFMANN INGRID	教養学部附属教養教育開発機構准教授	
21.10.1 GILMORE ALEXANDER	教養学部附属教養教育開発機構准教授	京都大学大学院人間・環境学研究科外国人教師
21.10.1 大桃 敏行	大学院教育学研究科教授	東北大学大学院教育学研究科教授
21.10.1 市村 強	地震研究所准教授	東京工業大学大学院理工学研究科准教授
21.10.1 Chard Robert Lawrence	東洋文化研究所准教授	
(昇 任)		
21.10.1 橋爪 隆	大学院法学政治学研究科教授	大学院法学政治学研究科准教授
21.10.1 岩崎 真一	大学院医学系研究科准教授	医学部講師
21.10.1 森 良之	大学院医学系研究科准教授	医学部講師
21.10.1 舘川 宏之	大学院農学生命科学研究科准教授	大学院農学生命科学研究科講師
21.10.1 内田 さやか	大学院総合文化研究科准教授	大学院工学系研究科助教
(兼 務 命)		
21.10.1 吉川 洋	大学院経済学研究科長 経済学部長	大学院経済学研究科教授

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

「行動シナリオ」の できるまで

～素案作成までの裏側に迫る～

濱田総長が策定を進めてきた「行動シナリオ」は、10月の総長補佐会、科所長会議に素案が提示されました。今後、いろいろな場で多くの方のご意見を伺いつつ、年明けを目途に完成版を公表する予定です。

今回は、議論の経過をたどりつつ、「行動シナリオ」素案提示までの経緯を紹介します。

始まりは6月15日。濱田総長が行動シナリオの起草担当者として選んだ7人の先生方（佐藤理事によれば「七人の侍」—学内広報No. 1388参照）と濱田総長との顔合わせでした。七人の侍の自己紹介に続き、濱田総長から「行動シナリオ」とはどのようなものか、何を書き込みたいのかなどの説明があり、七人の侍とのやりとりを通して、「行動シナリオ」の輪郭がぼんやりと浮き上がってきました。

顔合わせに引き続き、お盆休みまではほぼ週1回のペースで七人の侍が集まり、各理事の担当分野に関する説明・意見交換や学外の先生をお招きしたヒアリングを重ねます。教育、研究、国際などの話題を取り上げる中で、東大の課題と、濱田総長の任期中になすべきことが浮き彫りになってきます。

8月22日～23日には関係者全員での「合宿」による集中討議も行われました。合宿といって

も、郊外の温泉地に出かけて…というわけではなく、土日に本部棟にこもって、総長室でひたすら議論を続けるというストイックなもの。その甲斐あって、方向性を定め、具体的な文章を起草する段階にまで至りました。

その後、9月に2回の会合を重ねて「素案の素案」を読みながら方向性の調整が進みます。最終的には濱田総長が全体を見渡しつつ修正を加え、まずはご意見を伺うため、「行動シナリオ」本文の素案が出来上がりました。

素案の状態で科所長や総長補佐、経営協議会の学外委員など、いろいろな方からのご意見を伺い、原案を策定していく予定です。この原案は11月以降、学内と卒業生の方に対して公表し、幅広くご意見をいただきたいと思っています。「行動シナリオ」策定のプロセスへのみなさまのご参加を、お待ちしております。

What's going on?

「行動シナリオ」 vol. 3

「行動シナリオ」の策定に向けた様々な動きを紹介いたします。

連絡先: 本部企画グループ(内線22393)

「シナリオ」と「ランキング」

10月8日、イギリスの教育専門誌 Times Higher Educationによる「世界大学ランキング」の2009年版が公表されました。2004年の発表以来、徐々に知名度を高め、最近では一般メディアにも取り上げられるようになってきています。大学関係者にとってはノーベル賞と並ぶ秋の風物詩…とまで言う少し大げさかもしれませんが、気にする人が多いのは間違いありません。

東大は22位と、昨年19位から若干順位を落としつつも、アジア地域トップの座は守りました。このランキングの指標は、ピアレビュー(40%)、企業の評価(10%)、教員・学生比率(20%)、教員あたり論文引用数(20%)、外国人教員数(5%)、留学生数(5%)で構成されています。ピアレビューなど研究力だけをみると、東大のランクはずっと上に上がります。東大は外国人教員数・留学生数が海外有力大学に比べて少ないために順位が下がっているのです。

このランキング、有力大学が簡単に比較でき、一見するととても便利なものに思えます。大学進学時にこのランキングを目安にして留学先を選ぶとい

う風潮も、少なからずあるようですし、大学として掲げるアクション・プランに目標順位を掲げている国内の大学も存在します。

しかし、「行動シナリオ」ではこのような目標を設定する予定はありません。もちろん、東大が国際的な競争を無視するというではありません。様々な指標を総合化するという、恣意性の入りやすい方法によりランキングすることは、大学の実力を必ずしも正確に示すものではないとの考えからです。

ランキングのような比較は他大学との違いを知り、自大学の改善に役立てるためには重要です。一方、たとえば国際化の度合いについて、言語的・地理的要因が異なる英米とアジアとを同じ基準で比較し、順位付けすることに意味があるかは疑問です。ランキングの評価を「他山の石」として改善に役立てる一方、順位に一喜一憂せず、大学として自ら必要と考える方向に向かっていくための筋書きが「行動シナリオ」なのです。

【佐藤慎一理事（副学長） 談】

原案公表、まもなく。

「行動シナリオ」の原案は近く公表し、教職員の方や卒業生の方にご覧いただき、多くのご意見をお寄せいただきたいと思います。

原案公表時にはポータルサイト等でお知らせしますので、多くの方にご覧いただき、下記アドレスまでご意見をお寄せくださいますよう、よろしくお願いいたします。

「行動シナリオ」ご意見
受付専用アドレス:

k-scenario@
adm.u-tokyo.ac.jp

Contents

特集

- 02 ノートPCリユース事業がスタート！！

NEWS

一般ニュース

- 04 地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)
第3回 統合地球エネルギー・水循環観測プロジェクト (CEOP) 会議開催
- 05 産学連携本部
平成21年度第1回東京大学産学連携協議会
アドバイザーボードミーティング開催される
- 05 地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)
「データ統合・解析システム (DIAS)」文部科学省
研究開発局審議官視察
- 06 海洋アライアンス
第6回イブニングセミナー開催
- 07 本部奨学厚生グループ
本郷第二食堂リニューアルオープン

部局ニュース

- 08 大学院経済学研究科・経済学部
部局長の交代
- 09 大学院工学系研究科・工学部
IAESTE (IAESTE) 研修生歓迎会、開催される
- 09 生産技術研究所
文部科学省次世代IT基盤構築のための研究開発
第1回「イノベーション基盤シミュレーションソフト
ウェアの研究開発」シンポジウムを開催
- 10 大学総合教育研究センター、海洋アライアンス
「海洋学分野における日中横断型教育ワークショップ」を開催
- 11 医科学研究所
医科学研究所附属病院でサマー・コンサート開かれる
- 11 史料編纂所
オランダ歴史研究所との共催セミナー開催
- 12 「卓越した若手研究者の自立促進プログラム」医科学研
究所、分子細胞生物学研究所、物性研究所、地震研究所
「卓越した若手研究者の自立促進プログラム」中間
成果発表会を開催
- 12 医科学研究所
新型インフルエンザ公開シンポジウム「Pandemic」
を開催
- 13 生産技術研究所
平成21年度 自衛消防活動審査会へ参加！
- 14 大学院教育学研究科・教育学部
AED (自動体外式除細動器) 操作講習会開催
- 14 医科学研究所
第16回東アジアシンポジウムに参加
- 15 大学院農学生命科学研究科・農学部
「平成21年度自衛消防隊操法大会」で念願の初優勝！
- 16 東洋文化研究所
奈良国立博物館との合同講座「悟りの世界・煩惱の
世界～東洋文化研究所の漢籍をめぐって～」を開催
- 16 大学院工学系研究科・工学部
「グローバルCOE拠点連携会議」で若手研究者交
流を推進

◆ 表紙写真 ◆

ノートPCリユース事業関連キャラクター
(2ページに関連記事)

コラム

- 18 Policy + alt vol.02
- 19 発掘！総長室総括委員会 第17回
- 20 Crossroad 産学連携本部だより vol.47
- 21 インタープリターズ・バイブル vol.27
- 21 Relay Column「ワタシのオシゴト」第44回
- 22 コミュニケーションセンターだより No.61
- 22 ケータイからみた東大～東大ナビ通信～

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 23 地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)
第4回国家基幹技術「海洋地球観測探査システム」
フォーラム

募集

- 24 東京大学サステナブルキャンパスプロジェクト(TSCP)室
冬期の省CO₂・省エネポスターのアイデア募集！

お知らせ

- 24 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第523(10月7日)号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——
- 24 大学院総合文化研究科・教養学部
駒場博物館特別展「観世家のアーカイブ—世阿弥直
筆本と能楽テキストの世界—」のご案内
- 25 附属図書館
特別展示会「日本の天文学の歩み—世界天文年
2009によせて—」の開催
- 25 情報基盤センター
11月は「秘書さんのための講習会」を開催
“情報探索ガイダンス”各種コースのご案内
- 27 情報基盤センター
中国語による“留学生向け情報探索ガイダンス”の
お知らせ
- 27 大学院人文社会系研究科・文学部、大学院教育学研究科・
教育学部、大学院理学系研究科・理学部
進路セミナー「『学校の先生』という仕事」開催の
お知らせ
- 27 気候システム研究センター
一般公開講座2009「気候研究の20年—その黎明
期から地球温暖化・環境変化の時代へ—」のご案内
- 28 大学院教育学研究科・教育学部
第5回公開講座「自らを傷つける子どもたち～自傷
行為の理解と予防に向けて～」のご案内
- 28 大学院農学生命科学研究科・農学部
第37回東京大学農学部公開セミナー

事務連絡

- 29 人事異動(教員)

巻末特別記事

- 30 What's going on? 「行動シナリオ」Vol.3

淡青評論

- 32 三四郎池



七徳堂鬼瓦

三四郎池

大学を卒業してすぐ留学し、その後米国で何年間か教壇にたったころ、夏の数か月はスタンフォード大学の夏季セミナーで過ごすのが常だった。当時、毎年のように顔をあわせたのが、2005年にノーベル経済学賞を受賞したロバート・オーマンである。彼はすでにゲーム理論の世界的権威だったが、研究の日常は普通の人と少し違っていた。論文を読み同僚と会話をおこなうことをのぞけば、彼は一日中、椅子にすわって窓から景色を眺めながら、深い瞑想にふけり続けるのである。この沈黙考こそが、彼の独創的で奥の深い研究を生み出しているのだということに気付くのに時間はかからなかった。それ以来、私自身にとっても、研究のための静かな環境と時間を与えてくれる場所が大事になった。

25年ほど前に東大に移って以来、私に思索の時間を与えてくれたのが、三四郎池である。学内外の会議や電話に疲れると、毎日のように一人で三四郎池の散策に出た。ゆっくり一周するのにかかる20分ほどの時間が、何度行き詰まった研究論文を解きほぐし、新しい研究課題を思いつかせてくれたことだろうか。

とはいえ、当時の三四郎池は思索の場として決して望ましい場所ではなかった。水は汚れきって魚もおらず、水辺も周囲もゴミだらけ。一言でいって、荒廃しきった水場でしかなかった。東大関係者の何人もの陰の努力があったのだろう。それから20年以上たって、池は見違えるようにきれいになった。汚れた水を循環させてきれいにするため池底に幾つものポンプがとりつけられ、多数の緋鯉や鮒がはなされた。水辺には木杭が打たれ、崖には竹垣が作られ、滝からも常に水が落ちるようになり、池を囲む環境も落ち着いた。道路面や石組も整備されたから、頭で数式を解きながら歩いてもつまづくこともない。桜や藤の花が咲くころは、心洗われる雰囲気をかもしだすようになった。

三四郎池に限らず、ここ10年程の間に本郷も駒場もキャンパスが見違えるほどきれいになった。緻密な思索が必要な研究者にとってだけでなく、若い感性をもった学生たち、そして大学を訪れる外部の方々にも心地よい潤いを与えている。利便性や効率性ばかりが重視される世の中だが、一見無駄と思われる豊かな自然環境があって初めて、大学の意味が増すのではないだろうか。

藤原正寛（大学院経済学研究科・経済学部）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

No. 1391 2009年10月23日

東京大学広報委員会

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報グループ

TEL : 03-3811-3393

e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

<http://www.u-tokyo.ac.jp>

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。